

町内遺跡発掘調査報告書Ⅵ

2006.3

埼玉県入間郡三芳町教育委員会

はじめに

三芳町は、武蔵野の面影を偲ばせる雑木林と田園風景が随所に広がる、緑豊かな町であるとともに、県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」や県指定有形民俗文化財「竹間沢車人形」などをはじめとする多くの文化財を伝え残す町でもあります。

昭和40年代までは、畑作中心の純農村地帯として発展してきましたが、都心から30km圏内に位置することから、高度経済成長期からバブル期にかけて、住宅開発や工場・倉庫等の進出によりその姿は急速に変貌を遂げてきました。

このような都市化の進展や経済的な発展の代償として、緑地や文化財が失われてきたのも事実であり、教育委員会としては、文化財保護を教育行政の重点施策に位置づけ、先人たちが培ってきた様々な文化や歴史を、将来への発展の礎となる貴重な遺産として保護し、伝え残していく努力を続けています。とりわけ、町内に残された32カ所の遺跡は幸いにして国・県の補助を得て記録保存のための発掘調査を実施することができました。

ここに刊行する町内遺跡発掘調査報告書Ⅵには、国庫・県費補助事業として平成15年度から平成17年度の3カ年にわたり実施した町内遺跡発掘調査事業の成果が記録されています。

開発に先立つ発掘調査が実施され、本書が刊行できますことは、ひとえに関係各位のご理解とご協力の賜と厚く御礼申し上げます。

また、本書が郷土の歴史・文化遺産を伝え残し、三芳町がより一層の発展を遂げていくための一助となることを願ってやみません。

三芳町教育委員会
教育長 池上 仁

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡三芳町に所在する三芳町町内遺跡の発掘調査成果の報告書である。発掘調査および整理作業は三芳町教育委員会が主体となり、国庫・県費補助事業として平成15年度から平成17年度までの3年間に実施した調査成果をまとめた。
2. 本書に収録した発掘・試掘確認調査は、国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」事業として、平成15年度に総額1,527,029円（国庫750,000円・県費250,000円・町費527,029円）、平成16年度に総額1,850,422円（国庫900,000円・県費300,000円・町費650,422円）、平成17年度に総額2,028,468円（国庫1,000,000円・県費333,000円・町費695,468円）をもって実施したものである。本書の作成は、平成17年度国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」事業の一環として実施した。なお、平成14年度に実施した南止遺跡E地点の調査成果については、年度末の調査であり前回報告に未記載であるため、本書に調査成果を収録する。
3. 自然化学分析については、平成17年度の町費事業として行った。
4. 調査組織は下記の通りである。

調査主体者 三芳町教育委員会
教 育 長 池上 仁
調査事務局 生涯学習課
生涯学習課長 金子 明
同 課長補佐 鈴木義雄
文化財保護係長 鈴木義雄(平成16年3月まで)
" 伊東正男(平成17年3月まで)
" 松本富雄(平成17年4月より)
文化財保護係・発掘調査担当 大久保 淳、中村 愛
三芳町臨時職員・調査員 雨宮悟郎

5. 本書の編集、原稿執筆、挿図・図版作成は大久保淳が行い、Ⅲ - 2 - 3)【出土遺物】については中村智美・大久保淳が共同執筆、Ⅲ - 5については中村愛が執筆した。また作成に当たっては、松本富雄、柳井章宏・越前谷理の協力を得た。
6. 出土遺物実測図、出土遺物写真撮影については、藤波啓容が行った。
7. 本書に掲載した附編「自然化学分析」は、国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」事業として平成15年度に実施した宮前遺跡A地点、平成16年度に実施した俣埜遺跡I地点より検出された炭化材の樹種同定・放射性炭素年代測定の実験報告である。分析にあたっては町費事業として業務委託を行った。
8. 本書に掲載した地図は、三芳町発行の1/2,500、1/10,000三芳町全図である。
9. 発掘調査及び出土資料の整理・報告にあたり、下記の諸氏・関係機関のご教授・ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

会田明、荒井幹夫、石塚和則、市丸靖子、加藤秀之、亀田直美、川島雅人、隈本健介、栗島義明、小出輝雄、笹森健一、佐藤康二、鈴木美保、早田勉、高崎直成、田中英司、坪田幹男、早坂廣人、平野寛之、藤波啓容、堀善之、鍋島直久、西井幸雄、野口淳、安井智幸、柳沢健司、和田晋治、埼玉県生涯学習文化財課、ふじみ野市教育委員会、富士見市教育委員会、(有)アルケーリサーチ、(株)古環境研究所

10. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。(敬称略)

新井光持、伊藤恵美子、稲葉正子、今井武久、内山茂男、江刺家立子、大久保和恵、小木吉久、数馬田惟、亀貝由紀子、駒形佐武郎、佐藤洋子、下田綾子、高埜美栄子、田村早苗、富田茂男、仲井キヨ子、中野純一、永野仁美、長浜啓子、永堀八重子、西村恵子、野上吉樹、八田香能子、林文夫、福田悦子、堀田敦子、保谷野未来、黛佳代子、向竹之、山田あつ子

目次

はじめに	
例言	
目次・挿図目次・表目次・写真図版目次	
I. 序章	1
1. 三芳町町内遺跡について	1
1. 遺跡の立地と環境	2
II. 年度ごとの調査概要	4
1. 発掘調査	4
2. 試掘確認調査	4
III. 各遺跡の調査	5
1. 藤久保東遺跡K地点の調査	5
1) 遺跡の立地と環境	5
2) 調査の概要	5
3) 遺構と遺物	5
2. 南止遺跡E・F地点の調査	8
1) 遺跡の立地と環境	8
2) 調査の概要	8
3) 遺構と遺物	8,10,13
3. 宮前遺跡A地点の調査	14
1) 遺跡の立地と環境	14
2) 調査の概要	14
3) 遺構と遺物	14
4. 俣埜遺跡の調査	16
a. H地点	16
1) 遺跡の立地と環境	16
2) 調査の概要	16
3) 遺構と遺物	16
b. I地点	17
1) 調査の概要	17
2) 遺構と遺物	17
5. 南新埜遺跡A地点の調査	18
1) 遺跡の立地と環境	18
2) 調査の概要	18
3) 遺構と遺物	18
附編 自然科学分析	20
1. 宮前遺跡A地点自然科学分析	20
2. 俣埜遺跡I地点自然科学分析	22

挿図目次

第1図 三芳町遺跡分布図(1/30,000)	3
第2図 藤久保東遺跡K地点調査位置図(1/2,500)・遺構配置図(1/1,200)	5
第3図 藤久保東遺跡K地点石器集中1器種別・母岩別分布図(1/80)	6
第4図 南止遺跡E・F地点調査位置図(1/2,500)・トレンチ配置図(1/8,000)	8
第5図 南止遺跡E・F地点遺物分布図(1/700)	9
第6図 南止遺跡E・F地点出土遺物実測図(1)	11
第7図 南止遺跡E・F地点出土遺物実測図(2)	12
第8図 宮前遺跡A地点調査位置図(1/2,500)・遺構配置図(1/500)	14
第9図 宮前遺跡A地点1号木炭窯平面図・断面図・土層図(1/80)	15
第10図 俣埜遺跡H・I地点調査位置図(1/2,500)	16
第11図 俣埜遺跡H地点遺構配置図(1/500)・出土石器(3/5)	16
第12図 俣埜遺跡I地点開掘図(1/800)	17
第13図 俣埜遺跡I地点遺構平面図(1/100)	17
第14図 南新埜遺跡A地点調査位置図(1/2,500)	18
第15図 南新埜遺跡A地点遺構配置図(1/500)・礫群1遺物分布図(1/80)・出土石器(1/1)	19

表目次

第1表 試掘確認調査一覧表	4
第2表 藤久保東遺跡K地点遺物観察表	7
第3表 南止遺跡E・F地点遺物観察表	13
第4表 宮前遺跡A地点出土炭化材の放射性炭素年代測定試料と方法	21
第5表 宮前遺跡A地点出土炭化材の放射性炭素年代測定結果	21
第6表 俣埜遺跡I地点出土炭化材の放射性炭素年代測定試料と方法	23
第7表 俣埜遺跡I地点出土炭化材の放射性炭素年代測定結果	23

写真図版目次

写真図版 1 平成 15 年度調査 藤久保東遺跡 K 地点

藤久保東遺跡 K 地点調査前全景
藤久保東遺跡 K 地点表土剥ぎ
藤久保東遺跡 K 地点調査風景
藤久保東遺跡 K 地点石器集中 1
藤久保東遺跡 K 地点石器集中 1 遺物出土状況
藤久保東遺跡 K 地点土層堆積状況
藤久保東遺跡 K 地点完掘
藤久保東遺跡 K 地点埋め戻し

写真図版 2 平成 15 年度調査 藤久保東遺跡 K 地点

藤久保東遺跡 K 地点出土遺物

写真図版 3 平成 14・15 年度調査 南止遺跡 E・F 地点

南止遺跡 E・F 地点調査前全景
南止遺跡 E 地点溝検出状況
南止遺跡 E 地点調査風景
南止遺跡 E 地点礫群 1
南止遺跡 E 地点礫群 1 遺物出土状況
南止遺跡 E 地点石器集中 3
南止遺跡 E 地点石器集中 3 遺物出土状況
南止遺跡 F 地点土坑検出状況

写真図版 4 平成 14・15 年度調査 南止遺跡 E・F 地点

南止遺跡 F 地点調査風景
南止遺跡 F 地点礫群 3
南止遺跡 F 地点礫群 6
南止遺跡 F 地点石器集中 6・7
南止遺跡 F 地点礫群 10
南止遺跡 F 地点土層堆積状況
南止遺跡 E・F 地点埋没谷土層堆積状況
南止遺跡 F 地点完掘

写真図版 5 平成 14・15 年度調査 南止遺跡 E・F 地点

南止遺跡 E 地点出土遺物
南止遺跡 F 地点出土遺物

写真図版 6 平成 15 年度調査 宮前遺跡 A 地点

宮前遺跡 A 地点調査前全景
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯検出状況
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯内部状況
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯調査風景
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯土層堆積状況
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯工具痕
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯煙道
宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯完掘

写真図版 7 平成 16 年度調査 俣埜遺跡 H・I 地点

俣埜遺跡 H 地点調査前全景
俣埜遺跡 H 地点遺物出土状況
俣埜遺跡 H 地点完掘
俣埜遺跡 H 地点出土遺物
俣埜遺跡 I 地点調査前全景
俣埜遺跡 I 地点調査風景
俣埜遺跡 I 地点 2 号土坑
俣埜遺跡 I 地点 1 号粘土採掘坑土層堆積状況

写真図版 8 平成 16 年度調査 俣埜遺跡 I 地点・

南新埜 A 地点
俣埜遺跡 I 地点 2・3・4 号木炭窯

俣埜遺跡 I 地点 2 号木炭窯土層堆積状況

俣埜遺跡 I 地点 3・4 号木炭窯土層堆積状況

俣埜遺跡 I 地点 5 号木炭窯

南新埜遺跡 A 地点調査前全景

南新埜遺跡 A 地点礫群 1

南新埜遺跡 A 地点土層堆積状況

南新埜遺跡 A 地点出土遺物

写真図版 9 平成 16・17 年度調査 藤久保東遺跡 Q 地点・

三芳唐沢遺跡・藤久保東第二遺跡 C 地点

藤久保東遺跡 Q 地点調査前全景

藤久保東遺跡 Q 地点完掘

三芳唐沢遺跡調査前全景

三芳唐沢遺跡完掘

藤久保東第二遺跡 C 地点調査前全景

藤久保東第二遺跡 C 地点調査風景

藤久保東第二遺跡 C 地点遺物出土状況

藤久保東第二遺跡 C 地点土層堆積状況

写真図版 10 平成 17 年度調査 藤久保東第二遺跡 C 地点・

中東遺跡・古井戸山遺跡

藤久保東第二遺跡 C 地点完掘

中東遺跡調査前全景

中東遺跡完掘

古井戸山遺跡調査前全景

古井戸山遺跡調査風景

古井戸山遺跡遺物出土状況

古井戸山遺跡遺構検出状況

古井戸山遺跡遺構検出状況

写真図版 11 平成 17 年度調査 本村北遺跡・三芳唐沢遺跡 a・

b・藤久保東遺跡 T 地点

本村北遺跡調査前全景

本村北遺跡完掘

三芳唐沢遺跡 a 調査前全景

三芳唐沢遺跡 a 完掘

三芳唐沢遺跡 b 調査前全景

三芳唐沢遺跡 b 完掘

藤久保東遺跡 T 地点調査前全景

藤久保東遺跡 T 地点調査風景

写真図版 12 平成 17 年度調査 藤久保東遺跡 T 地点・

境松遺跡 A 地点・新開遺跡

藤久保東遺跡 T 地点遺物出土状況

藤久保東遺跡 T 地点礫群検出状況

藤久保東遺跡 T 地点完掘

境松遺跡 A 地点調査前全景

境松遺跡 A 地点遺物出土状況

境松遺跡 A 地点完掘

新開遺跡調査前全景

新開遺跡完掘

I. 序 章

1. 三芳町町内遺跡について

三芳町は、埼玉県南西部の荒川右岸台地上に位置し、西方には富士山と秩父、多摩の山並みを遠望する平野地帯である。地形としては、西方約 50km 先の青梅市付近を扇頂として広がる武蔵野台地の北東部にあたり、台地縁辺から切り込む開析谷により僅かな起伏をもつものの、そのほとんどが関東ローム層に厚く覆われ、ほぼ平坦な地形を呈している。

三芳町は、上述のように関東ローム層の厚く堆積した台地が占め、特に町の西部域は現在流れる河川も少なく、広々とした台地が続いている。近年の発掘調査により西部域にも数条の埋没谷が存在し、その周辺において旧石器時代から縄文時代早期の遺跡の存在が明らかになりつつあるが、谷の埋没以降、西部域の集落形成は江戸時代の新田開発が行われるまで待たねばならなかったようである。西部域で行われた新田開発の中でも、元禄 7 年から 9 年 (1694 ~ 96) に川越藩主柳沢吉保の命により行われた三富地区の畑作新田開拓地(三芳町大字上富、所沢市中富、下富)は、埼玉県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」として指定されており、今なお整然とした屋敷地と畑地と雑木林の区画が残され、武蔵野の典型的な新田開拓の面影をとどめる地域として有名である。

一方、町東部域はより武蔵野台地の縁辺に近く、柳瀬川をはじめとする荒川の沖積面に向かう数条の河川や開析谷が台地を切り込むように存在する。東部域はこれらの河川に沿って早くから開発が進み、西部域とは異なった様相を呈し、また原始・古代の遺跡も数多く存在する。

近年まで、三芳地域は自然環境に適応しつつ純農村地帯として緩やかな発展を遂げてきたが、都心より 30km 圏内にあることから都市化の波を強く受け、高度経済成長期からバブル期にかけて急激に変化してきた。町の東隣を走る東武東上線と地下鉄有楽町線の相互乗り入れ、関越自動車道路の貫通と所沢インターチェンジ設置等の交通手段の改善は、工場・倉庫等の企業進出や個人住宅・アパート・マンション等の住宅建設を促進させる結果となった。

三芳町には、現在 32 か所の埋蔵文化財包蔵地が知られるが、当然のことながら開発行為は埋蔵文化財包蔵地内にも及び、破壊の危機にさらされてきている。すでにそのうちの一部は住宅開発等により煙滅してしまったものもある。三芳町ではこうした状況に対処すべく、文化財保護法改正後、特に昭和 51 年度以降埋蔵文化財の保護、とりわけ記録保存のための発掘調査に力を注いできた。しかし、このような発掘調査は蚕食的・個別的調査であることが多く、十分な時間と費用を費やし調査が実施できぬことも多く、また、開発者との間で調査費用・期間等について問題が生じることも少なくなかった。

町では、このような問題を少しでも解消すべく国庫・県費の補助を得て、「三芳町町東部遺跡群発掘調査事業」(昭和 53 年度～昭和 57 年度)、「三芳町町内遺跡群発掘調査事業」(昭和 58 年度～平成元年度)、「三芳町町内遺跡発掘調査事業」(平成 2 年度～)として調査を実施してきた。遺跡範囲確認調査の実施により調査期間、調査方法、調査費用の積算等が容易になったことと、利益を目的としない個人住宅開発等の費用負担の問題を解消できたことは本事業の成果といえる。

本事業により、平成 15 年度は発掘調査 1 件、試掘確認調査 2 件、平成 16 年度は試掘確認調査 5 件、平成 17 年度は試掘確認調査 10 件を実施するとともに、本報告書を刊行した。

今回の報告は、平成 15 年度から平成 17 年度までの 3 年間の成果の記録報告である。

2. 遺跡の立地と環境

三芳町は、埼玉県の西南部に位置し、東に志木市、富士見市、南東に新座市、南西に所沢市、北にふじみ野市、川越市と接する。面積は 15.3k m²、人口は約 36,000 人である。地形的には、多摩川の開析扇状地といわれる武蔵野台地上の北東部縁辺付近に位置している。町西部域は標高約 45m でほとんど平坦な地形を呈するが、標高 30m の等高線を境とする町東部域には東方の沖積地（荒川低地）に向かう河川が複数存在しており、遺跡の多くはこうした河川流域に分布している。

【砂川堀流域】

砂川堀流域には、平成 16 年実施の分布調査により新たに登録された遺跡が数多く存在する。発掘調査が行われていないため詳細は不明であるが、大半が旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡であると想定される。また、右岸に位置する宮前遺跡(19)では、奈良・平安時代の木炭窯が検出されている。同じ崖線上に位置し、奈良時代後半から平安時代にかけての大規模な製鉄遺跡である、ふじみ野市の東台遺跡に木炭を供給していた可能性もあり関連が注目される。

【江川流域】

江川最上流域付近には藤久保東遺跡(12)、藤久保東第二遺跡(10)、藤久保東第三遺跡(11)、俣埜遺跡(9)の旧石器時代を中心とした 4 つの遺跡が存在する。藤久保東遺跡、藤久保東第二遺跡では旧石器時代Ⅹ層から局部磨製石斧 3 点を含む 80 点以上の石器や礫が出土しており、県内最古の石器群である。また藤久保東遺跡ではⅩ層、Ⅸ層、Ⅷ層、Ⅵ層、Ⅴ層、Ⅳ層の各層から 15,000 点を超える石器や礫が江川旧河道に沿うように検出されている。俣埜遺跡では旧石器時代Ⅸ層～Ⅳ層にかけての石器、縄文時代早期の炉穴、縄文時代中期から後期の住居跡が検出されているほか、平成 16 年実施の発掘調査により奈良・平安時代の溶解炉、木炭窯、住居跡が検出され、町内で初めて製鉄遺跡の存在が確認された。

【唐沢堀流域】

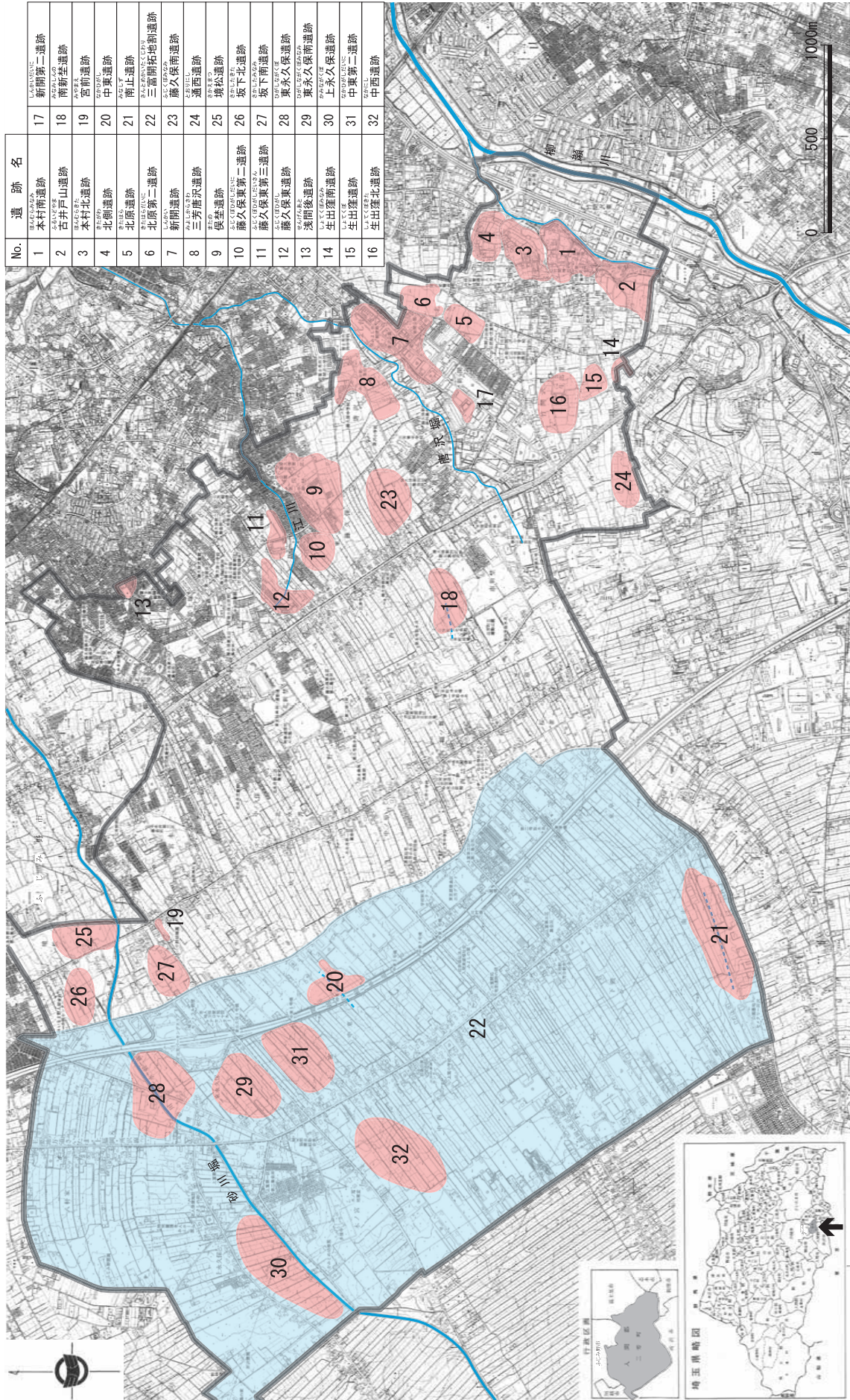
唐沢堀右岸には、新開遺跡(7)が存在する。昭和 51 年から調査が進められ、旧石器時代キャンプ跡や平安時代の須恵器窯跡、工房跡が検出されている。左岸には三芳唐沢遺跡(8)が存在し、旧石器時代のキャンプ跡が検出されている。

【柳瀬川流域】

柳瀬川左岸に位置する三芳町内には、上流より古井戸山遺跡(2)、本村南遺跡(1)、本村北遺跡(3)、北側遺跡(4)が存在する。古井戸山遺跡では旧石器時代のキャンプ跡や縄文時代前期の住居跡、弥生時代後期の住居跡が検出されるとともに、縄文時代早期～後期、弥生時代中期～後期、奈良・平安時代、中世の遺物が認められ、旧石器時代から弥生時代を中心としながらも連綿と続く複合遺跡である。隣接する本村南遺跡は、かつて弥生時代中期末葉(宮ノ台式)の土器が出土したことで知られる。発掘調査では宮ノ台式の住居跡や弥生時代後期の方形周溝墓が確認され、弥生時代中期末葉から後期末葉を中心とする集落遺跡である。本村北遺跡からは、縄文時代前期の住居跡 2 軒、古墳時代後期の住居跡 1 軒、奈良・平安時代の住居跡が 6 軒検出されている。北に隣接する北側遺跡では現在のところ発掘調査による遺構・遺物の検出は無いが、弥生時代後期の底部穿孔壺形土器の出土が知られる。

【西部域に存在する埋没谷流域】

近年の調査により、現在はほぼ平坦な地形である西部域にも数条の埋没谷が存在し、その周辺で遺跡の存在が明らかになりつつある。砂川堀に合流すると思われる埋没谷周辺には中東遺跡(20)が存在し、旧石器時代Ⅶ層、Ⅵ層から石器集中が確認されている。また、三芳町と所沢市の境を走る埋没谷周辺には南止遺跡(21)が存在し、旧石器時代Ⅶ層、Ⅳ層下部で石器集中、礫群が多数確認されているほか、Ⅲ層上部において野岳・休場型の非削片系細石刃核、細石刃が出土している。



第1図 三芳町遺跡分布図 (1/30,000)

Ⅱ. 年度ごとの調査概要

平成 15 年度から平成 17 年度までの 3 年間に、町内遺跡発掘調査事業において調査を実施した遺跡は 12 遺跡 17 地点である。このうち、平成 15 年度は発掘調査 1 件、試掘確認調査 2 件、平成 16 年度は試掘確認調査 5 件、平成 17 年度は試掘確認調査 10 件を行った。年度ごとの調査概要は以下のとおりである。

1. 発掘調査

1) 藤久保東遺跡 K 地点

所在地：三芳町大字藤久保字東 780-1 調査原因：個人住宅建築

調査期間：平成 15 年 4 月 7 日～ 4 月 28 日 調査面積：27 m²

開発者：

2. 試掘確認調査

平成 15 年度から平成 17 年度に実施した試掘確認調査は、下記の通りである。

遺跡名称	調査原因	調査地	調査期間	面積	確認内容
南止遺跡 F 地点	農地改良	上富 689-2 他	15.9.1 ~ 10.31	19,203 m ²	旧石器Ⅳ層石器集中、礫群盛土保存
宮前遺跡 A 地点	個人住宅	北永井 71-7	15.5.20 ~ 6.11	499 m ²	奈良時代木炭窯 1 基盛土保存
藤久保東遺跡 Q 地点	切土工事	藤久保 777 他	16.6.14 ~ 6.25	1,454 m ²	遺物・遺構なし
俣埜遺跡 H 地点	宅地造成	藤久保 354-8 他	16.8.17 ~ 9.1	398 m ²	旧石器Ⅵ層石器盛土保存
三芳唐沢遺跡	個人住宅	藤久保 449-7	16.8.20 ~ 8.25	300 m ²	遺物・遺構なし
南新埜遺跡 A 地点	体育館建設に伴う工事	藤久保 1088-1 他	16.10.18 ~ 11.4	603 m ²	旧石器Ⅳ層礫群受託調査実施
俣埜遺跡 I 地点	プール建設	藤久保 350-8 他	17.1.18 ~ 3.7	1,758 m ²	奈良時代木炭窯 5 基、粘土採掘坑 3 基、土坑 4 基、盛土保存 *別途報告予定
藤久保東第二遺跡 C 地点	幼稚園建設	藤久保 732-2 他	17.4.15 ~ 5.12	4,082 m ²	旧石器Ⅳ層石器、焼石盛土保存 *別途報告予定
中東遺跡	倉庫建設	上富 165-2 他	17.5.10 ~ 5.17	7,722 m ²	遺物・遺構なし
古井戸山遺跡	資材置場	竹間沢 947-3,4	17.7.11 ~ 7.21	828 m ²	縄文・弥生時代住居址、土坑盛土保存 *別途報告予定
本村北遺跡	個人住宅	竹間沢 794-2	17.9.21 ~ 9.22	276 m ²	遺物・遺構なし
三芳唐沢遺跡 a	個人住宅	藤久保 448-5	17.9.27 ~ 9.29	354 m ²	遺物・遺構なし
三芳唐沢遺跡 b	個人住宅	藤久保 448-2	17.9.27 ~ 9.29	354 m ²	遺物・遺構なし
藤久保東遺跡 T 地点	店舗建設	藤久保 781-1	17.12.1 ~ 12.20	1,187 m ²	旧石器Ⅳ層石器集中、礫群受託調査 *別途報告予定
境松遺跡 A 地点	資材置場	北永井 982-1 他	18.1.10 ~ 1.18	3,248 m ²	縄文時代土器片、土坑盛土保存
新開遺跡	駐車場造成	竹間沢 446-1	18.1.31 ~ 2.8	733 m ²	遺物・遺構なし
新開遺跡	分譲住宅	竹間沢 360-3	18.2.10 ~ 2.15	495 m ²	旧石器Ⅲ層礫群盛土保存 *次回報告

第 1 表 試掘確認調査一覧表

Ⅲ. 各遺跡の調査

1. 藤久保東遺跡K地点の調査

1) 遺跡の立地と環境

藤久保東遺跡は、新河岸川の支流である江川の最上流域付近一帯に広がる旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡である。平成5年度～6年度にかけて調査されたB地点からは、旧石器時代X層より局部磨製石斧が出土した。近年では、平成13年度から区画整理事業に伴う発掘調査が実施されており、X・IX・VII・VI・V・IV層の各層から15,000点を越える石器や礫が出土している。

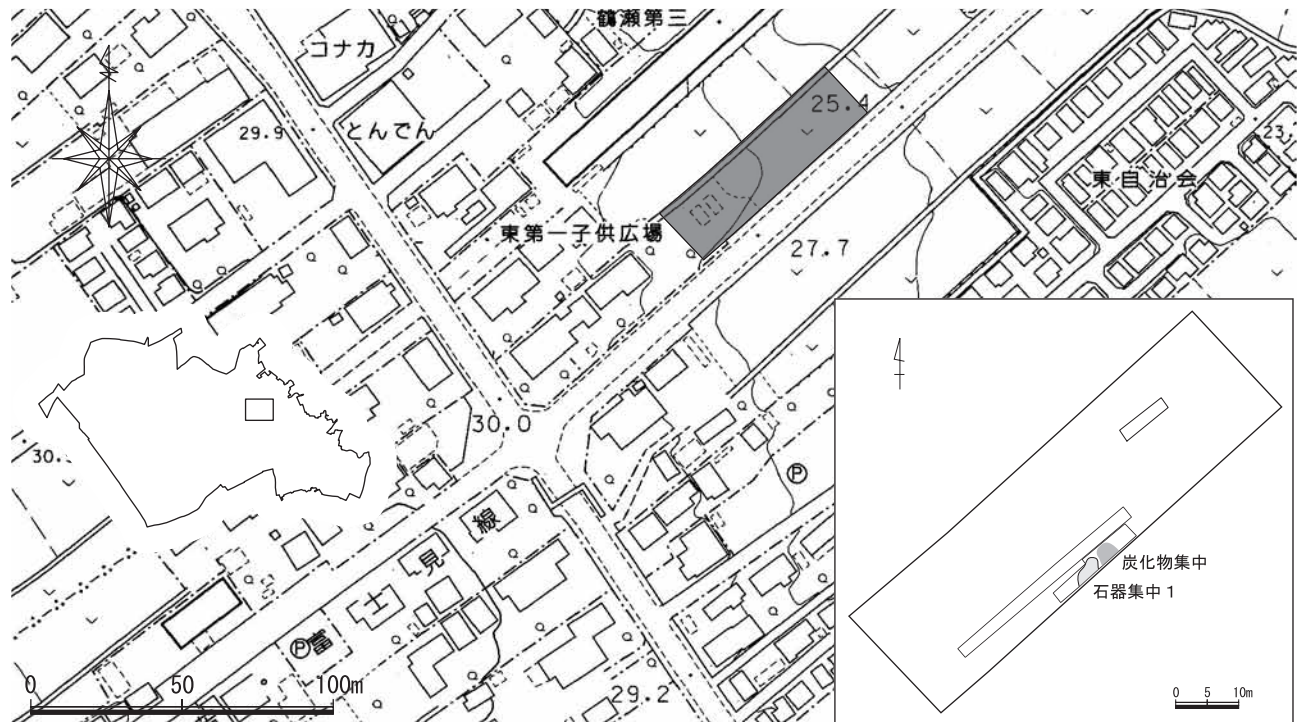
2) 調査の概要

今回の調査地点であるK地点は、埼玉県入間郡三芳町大字藤久保字東780-1に位置する。調査は個人住宅建築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成15年2月17日から3月26日にかけて1,217㎡を実施した。調査の結果、石器集中が検出されたため、申請者と協議を行い、範囲を限定した27㎡について平成15年4月7日から4月28日にかけて発掘調査を実施することとなった。今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号32-012)の南西部に位置し、江川旧河道の右岸台地上に位置する。

3) 遺構と遺物

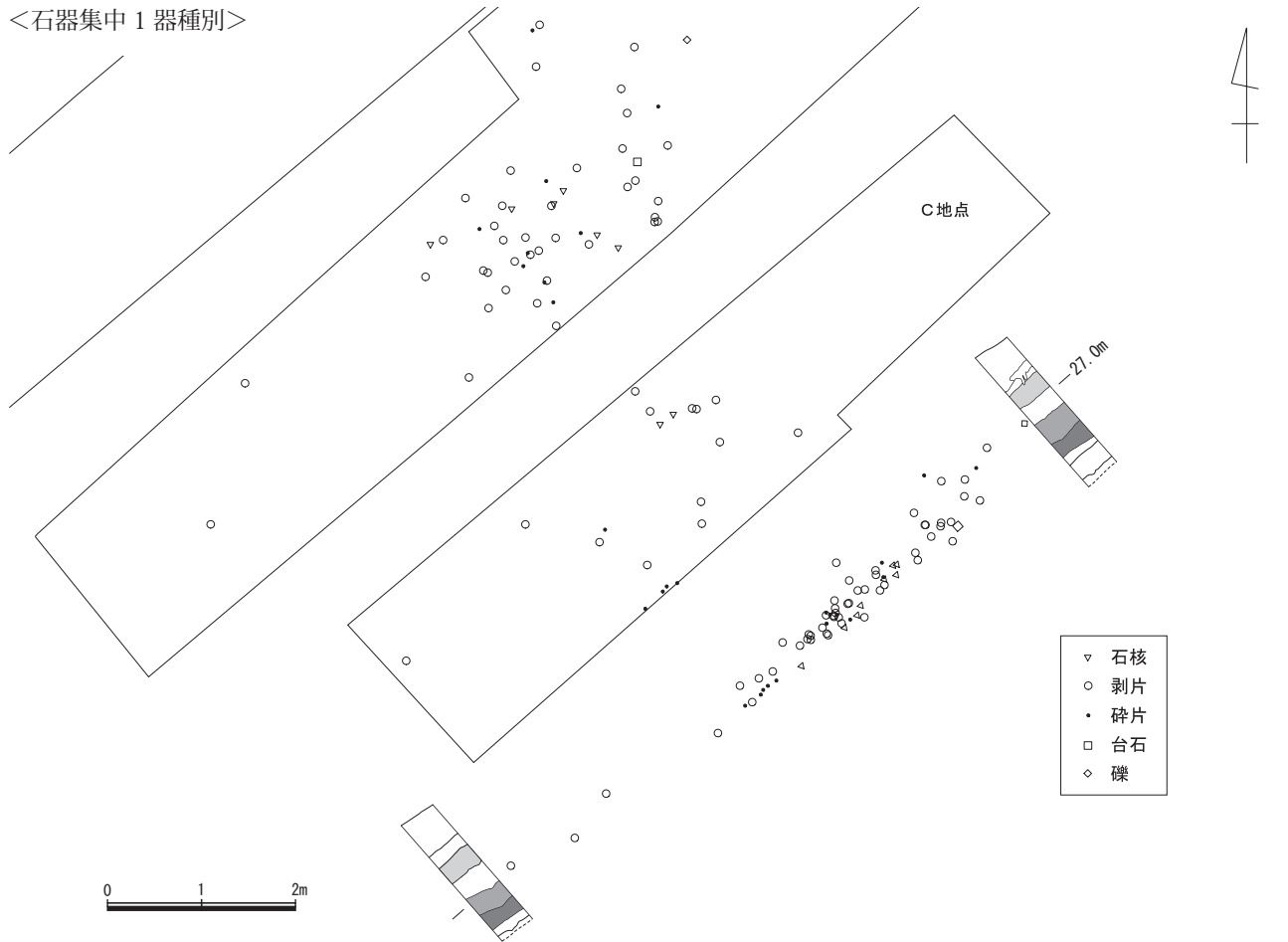
遺構は、VII層から石器集中1カ所、炭化物集中1カ所を検出、遺物は石器54点、礫1点が出土した。**【石器集中1】**遺物の平面分布は、南北3.4m×東西3mを測る。出土層位はVII層を主体とする。石材は約9割が同一母岩のチャート製であり、その約7割が接合関係にある。なお、過去に調査された隣接地点のC地点からも同一母岩のチャート製石器が20点出土しており、C・K地点を合わせると接合関係は約3mの範囲に集中して認められる。碎片の出土が少ないことから、この場所ではチャートを大きく荒割りし、石器として使える素材を取り出す作業を行ったものと考えられよう。

また、石器集中1の東側において同じくVII層から炭化物集中1ヶ所が検出された。炭化物1点の大きさは径0.3～0.5mmと小さいが、南北2.5m×東西3mの範囲内で集中して検出された。

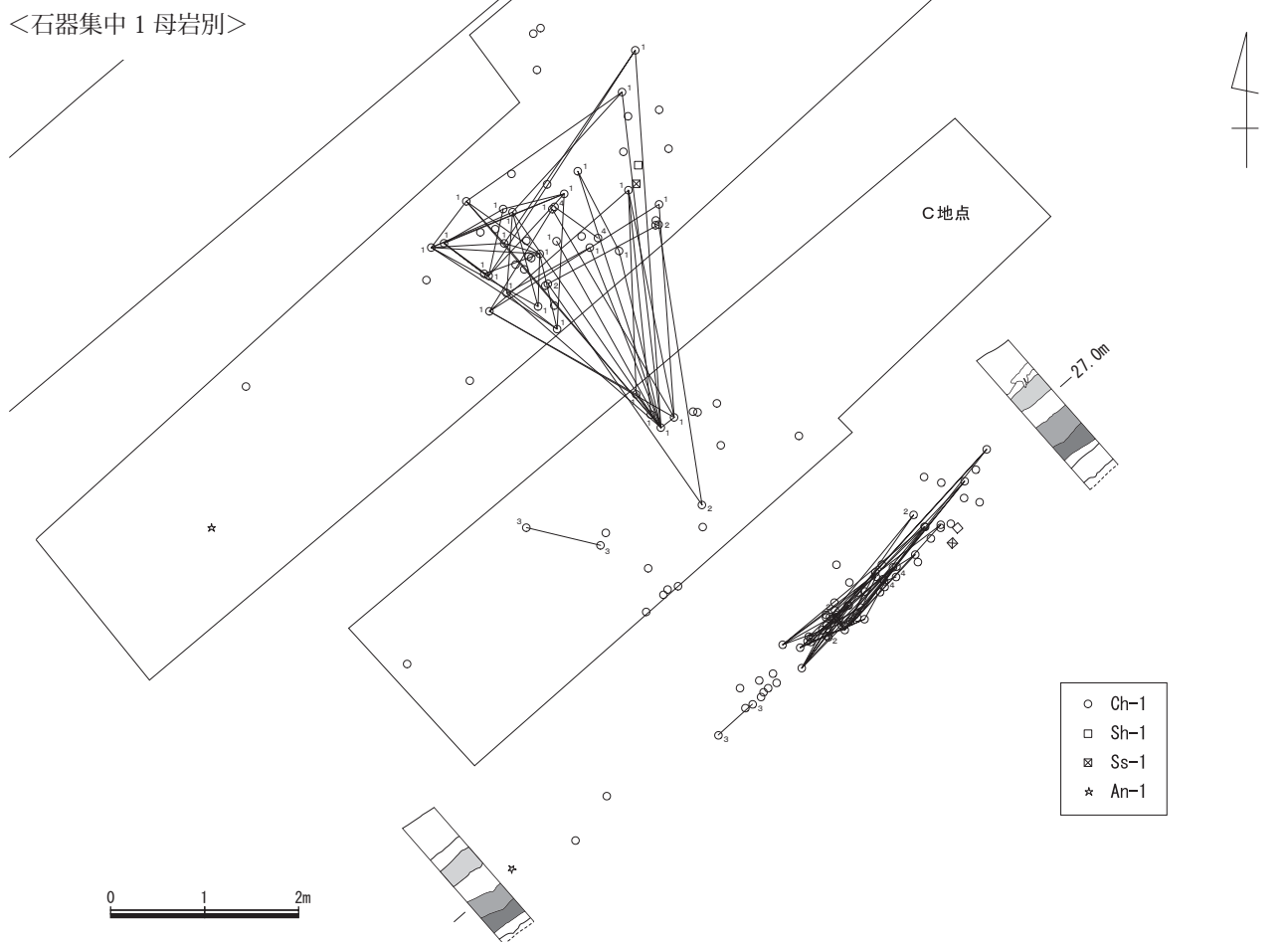


第2図 藤久保東遺跡K地点調査位置図(1/2,500)・遺構配置図(1/1,200)

<石器集中1器種別>



<石器集中1母岩別>



第3図 藤久保東遺跡K地点・C地点石器集中1器種別・母岩別分布図 (1/80)

地点	遺物 No.	器種	石材	母岩	接合個体 No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
K	1	剥片	チャート	Ch-1		11.0	7.5	3.0	0.19
K	2	石核	チャート	Ch-1	1	21.4	19.7	35.3	14.19
K	3	剥片	チャート	Ch-1	1	30.0	24.5	12.5	6.48
K	4	剥片	チャート	Ch-1		18.5	8.0	3.0	0.30
K	5	剥片	チャート	Ch-1	1	23.1	17.4	5.2	2.66
K	6	石核	チャート	Ch-1	1	56.6	50.5	31.7	64.61
K	7	剥片	チャート	Ch-1	1	20.1	11.1	8.5	1.31
K	8	剥片	チャート	Ch-1		6.0	5.5	2.0	0.05
K	9	剥片	チャート	Ch-1		15.0	7.5	3.5	0.42
K	10	剥片	チャート	Ch-1	1	25.0	14.0	8.0	2.21
K	11	剥片	チャート	Ch-1		44.0	46.0	8.0	16.12
K	12	剥片	チャート	Ch-1	1	39.0	14.0	15.0	12.06
K	13	剥片	チャート	Ch-1		18.5	20.0	9.0	3.50
K	14	剥片	チャート	Ch-1		51.0	31.5	9.0	10.71
K	15	剥片	チャート	Ch-1	2	42.5	28.5	13.0	16.50
K	16	剥片	チャート	Ch-1		19.0	10.5	5.0	0.96
K	17	剥片	チャート	Ch-1	1	27.0	21.5	15.0	7.32
K	18	剥片	チャート	Ch-1	1	29.5	9.5	9.5	3.50
K	19	剥片	チャート	Ch-1	1	26.0	27.0	7.0	4.04
K	20	剥片	チャート	Ch-1	1	18.0	22.0	10.5	3.70
K	21	剥片	チャート	Ch-1	1	47.5	27.5	9.5	16.05
K	22	剥片	チャート	Ch-1	1	27.0	25.0	10.5	7.88
K	23	剥片	チャート	Ch-1		24.0	38.0	7.0	5.13
K	24	剥片	チャート	Ch-1		50.5	38.0	13.5	21.75
K	25	剥片	チャート	Ch-1		19.0	28.5	6.0	2.61
K	26	剥片	安山岩	An-1		53.5	32.0	11.5	20.64
K	27	石核	チャート	Ch-1	4	40.3	27.0	25.9	20.19
K	28	剥片	チャート	Ch-1		7.0	20.5	7.0	1.34
K	29	剥片	チャート	Ch-1		6.0	6.5	7.0	0.37
K	30	剥片	チャート	Ch-1	1	24.0	11.0	5.5	2.07
K	31	剥片	チャート	Ch-1	1	13.0	28.5	9.0	2.56
K	32	剥片	チャート	Ch-1		36.0	23.0	9.0	4.98
K	33	石核	チャート	Ch-1	1	59.8	34.3	45.9	73.58
K	34	石核	チャート	Ch-1	4	48.5	44.0	15.5	33.17
K	35	剥片	チャート	Ch-1	1	38.0	34.5	16.5	10.87
K	36	剥片	チャート	Ch-1		15.5	12.0	3.5	0.69
K	37	剥片	チャート	Ch-1	2	30.5	27.0	11.0	9.09
K	38	剥片	チャート	Ch-1	1	18.0	22.0	7.0	2.73
K	39	剥片	チャート	Ch-1	1	27.0	27.0	9.0	4.23
K	40	台石	砂岩	Ss-1		160.0	104.0	93.5	1958.40
K	41	剥片	チャート	Ch-1		11.5	10.0	5.0	0.49
K	42	剥片	チャート	Ch-1		29.0	19.5	13.5	6.58
K	43	剥片	チャート	Ch-1		24.0	15.0	8.0	1.67
K	44	剥片	チャート	Ch-1		7.0	8.0	1.0	0.03
K	45	剥片	チャート	Ch-1	1	17.0	13.0	6.0	1.63
K	46	剥片	チャート	Ch-1	1	11.0	26.0	12.0	3.33
K	47	礫	砂岩			32.0	11.0	14.0	3.49
K	48	剥片	チャート	Ch-1		23.5	41.0	8.0	13.14
K	49	剥片	チャート	Ch-1		13.0	14.0	2.0	0.37
K	50	剥片	チャート	Ch-1		25.0	21.0	7.0	4.54
K	51	石核	チャート	Ch-1	1	38.9	49.2	30.8	78.09
K	52	剥片	チャート	Ch-1	1	17.0	21.0	5.0	1.53
K	53	剥片	チャート	Ch-1		14.5	21.5	3.0	1.07
K	54	剥片	頁岩	Sh-1		52.5	22.0	9.0	11.93
K	55	剥片	チャート	Ch-1		21.5	20.0	13.0	6.35
C	1	剥片	チャート	Ch-1		39.0	25.0	13.5	10.44
C	2	剥片	チャート	Ch-1		54.5	49.5	14.0	43.49
C	3	剥片	チャート	Ch-1		31.5	33.5	8.5	10.52
C	4	剥片	チャート	Ch-1		21.5	31.0	7.5	3.81
C	5	剥片	チャート	Ch-1	1	41.0	33.0	23.0	34.52
C	6	剥片	チャート	Ch-1	2	57.5	37.0	22.0	38.70
C	7	剥片	チャート	Ch-1		64.0	36.0	23.5	43.88
C	8	剥片	チャート	Ch-1		12.0	19.5	4.5	0.71
C	9	剥片	チャート	Ch-1		14.0	25.0	2.5	0.81
C	10	剥片	チャート	Ch-1		11.0	15.5	3.5	0.67
C	11	剥片	チャート	Ch-1		39.0	25.0	9.5	7.35
C	12	剥片	チャート	Ch-1		21.0	9.5	5.0	0.92
C	13	剥片	チャート	Ch-1	3	33.0	34.5	7.0	7.90
C	14	剥片	チャート	Ch-1		9.0	26.0	4.0	0.86
C	15	剥片	チャート	Ch-1		44.0	40.0	11.0	18.72
C	16	石核	チャート	Ch-1	1	92.3	72.3	52.2	407.12
C	17	石核	チャート	Ch-1	1	51.5	44.7	45.1	125.40
C	18	剥片	チャート	Ch-1	1	20.0	17.0	9.5	2.11
C	19	剥片	チャート	Ch-1		36.5	21.5	8.0	5.86
C	20	剥片	チャート	Ch-1	3	13.5	21.0	4.0	0.99

第2表 藤久保東遺跡K地点・C地点遺物観察表

2. 南止遺跡 E・F の調査

1) 遺跡の立地と環境

南止遺跡は、町の南西端から所沢市南永井を経て柳瀬川に至る埋没谷の最上流域付近に広がる、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡である。これまでに A～D 地点の調査が行われ、旧石器時代Ⅶ層、Ⅳ層下部、Ⅳ層上部、Ⅲ層より石器集中 2 カ所、礫群 4 カ所、縄文時代の集石 1 カ所、時期不明の溝 4 条が確認されている。

2) 調査の概要

南止遺跡 E・F 地点は、埼玉県入間郡三芳町大字上富字南止 704-2 他に位置する。調査は、農地改良工事(埋立による地盤かさ上げ)に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、E 地点 18,990 m²を平成 14 年 11 月 5 日から 12 月 2 日にかけて、F 地点 19,203 m²を平成 15 年 9 月 1 日～10 月 31 日にかけて実施した。調査の結果、旧石器時代の石器集中および礫群が多数確認されたため、この結果を申請者と協議し、遺構が確認された範囲周辺はローム層を掘削せず、盛土のみを行って遺跡を保存することとなった。

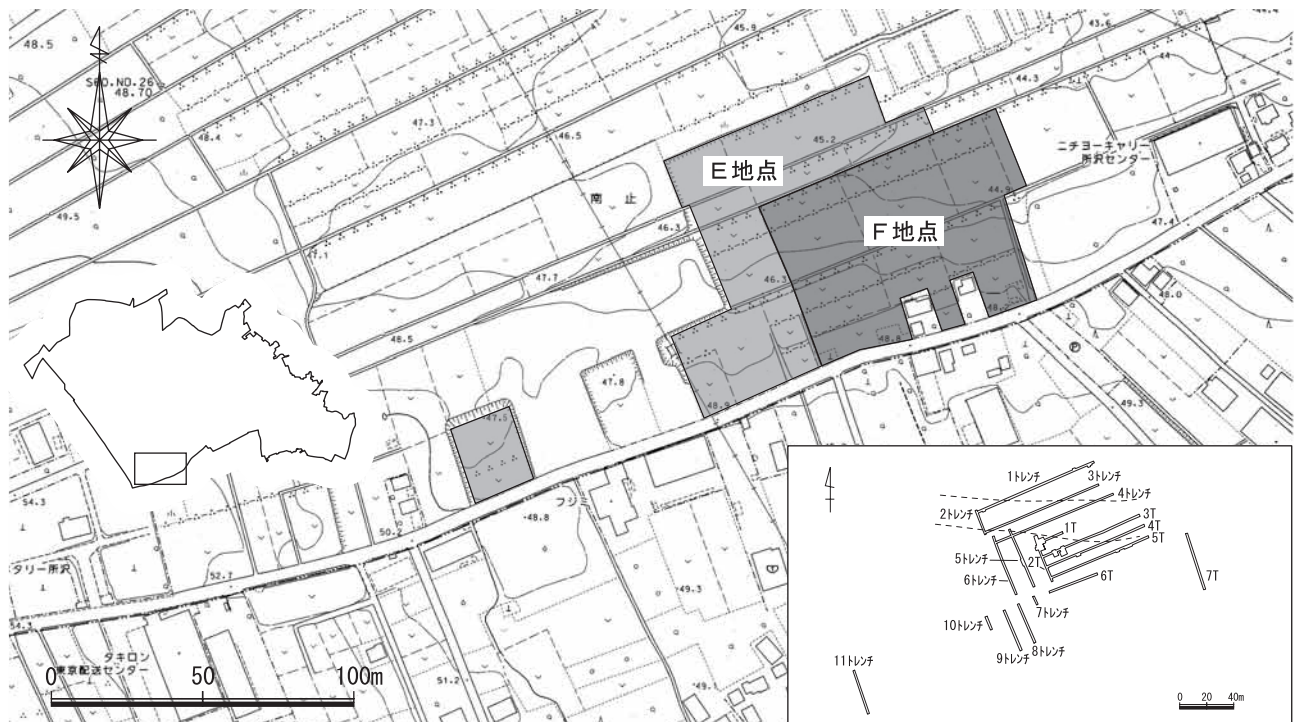
3) 遺構と遺物

遺構は、Ⅴ層より石器集中 1 カ所、礫群 2 カ所、Ⅳ層下部より石器集中 3 カ所、礫群 11 カ所、Ⅳ層上部より石器集中 2 カ所、Ⅲ層より石器集中 2 カ所、礫群 2 カ所、時期不明の土坑 1 基、溝 2 条が検出され、遺物は石器 1,682 点、礫 3,551 点が出土した。

【石器集中】埋没谷に沿うようにして、特に谷に近接した場所にまとまって分布している。埋没谷右岸での出土量に比べ、左岸での出土は少ない。また、ほぼ全ての石器集中が礫群と重なるように分布している。石材は黒曜石製が主体であり、次いでチャート、頁岩、砂岩、凝灰岩製の順に多い。

石器集中 3 からはⅣ層下部より先端・基部加工のチャート製ナイフ形石器が出土している。同様の石器は、町内では新開遺跡においてⅣ層下部より 1 点出土している。石器集中 6・7 から出土した石器は、ほぼ全てが黒曜石製であり、また横長剥片を素材とするナイフ形石器が多数出土している。

【礫群】埋没谷に沿って、石器集中よりも広範囲にわたり分布している。石材は砂岩が主体である。



第 4 図 南止遺跡 E・F 地点調査位置図 (1/2,500)・トレンチ配置図 (1/8,000)

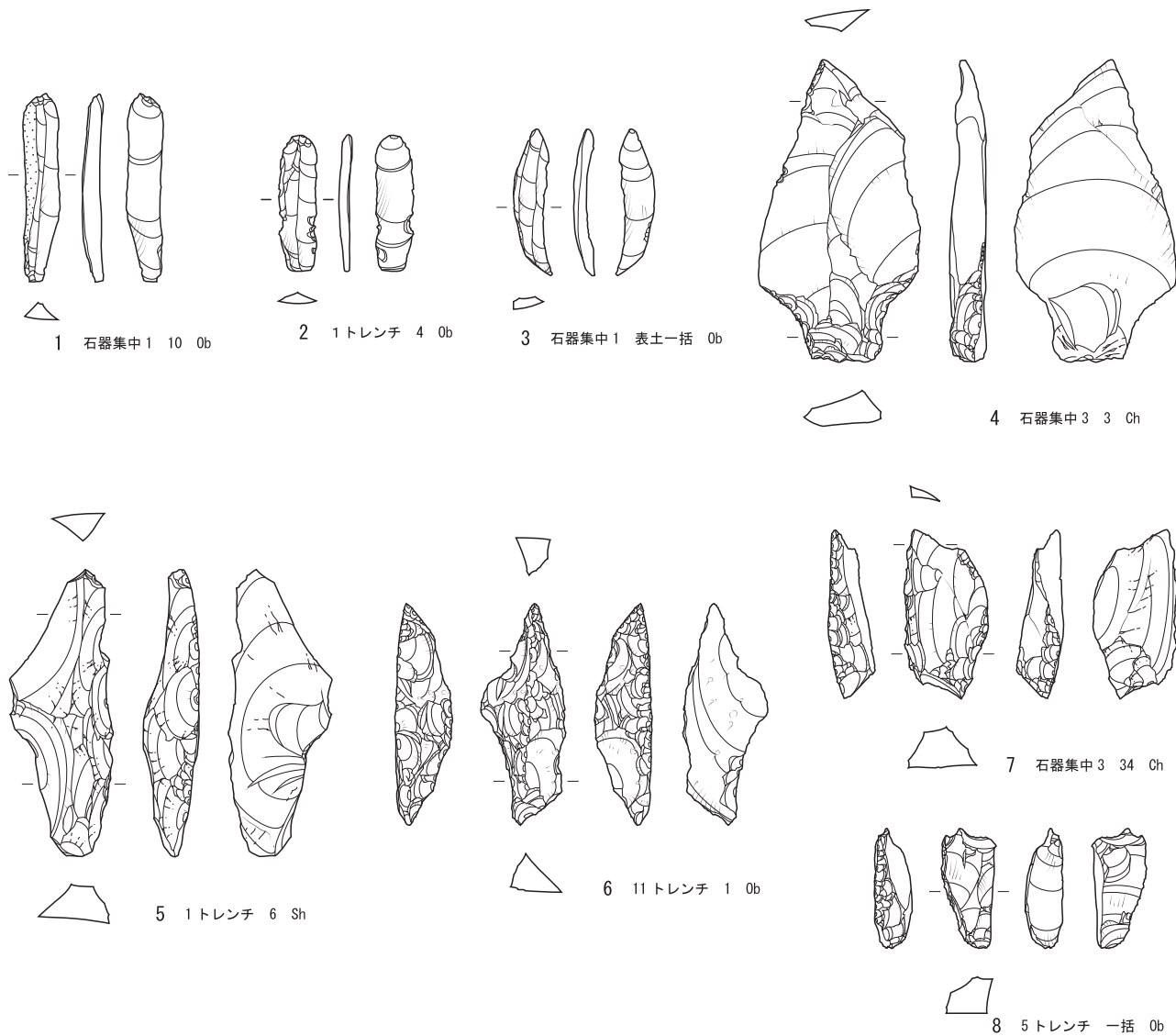


第5图 南止遺跡E・F地点遺物分布图(1/700)

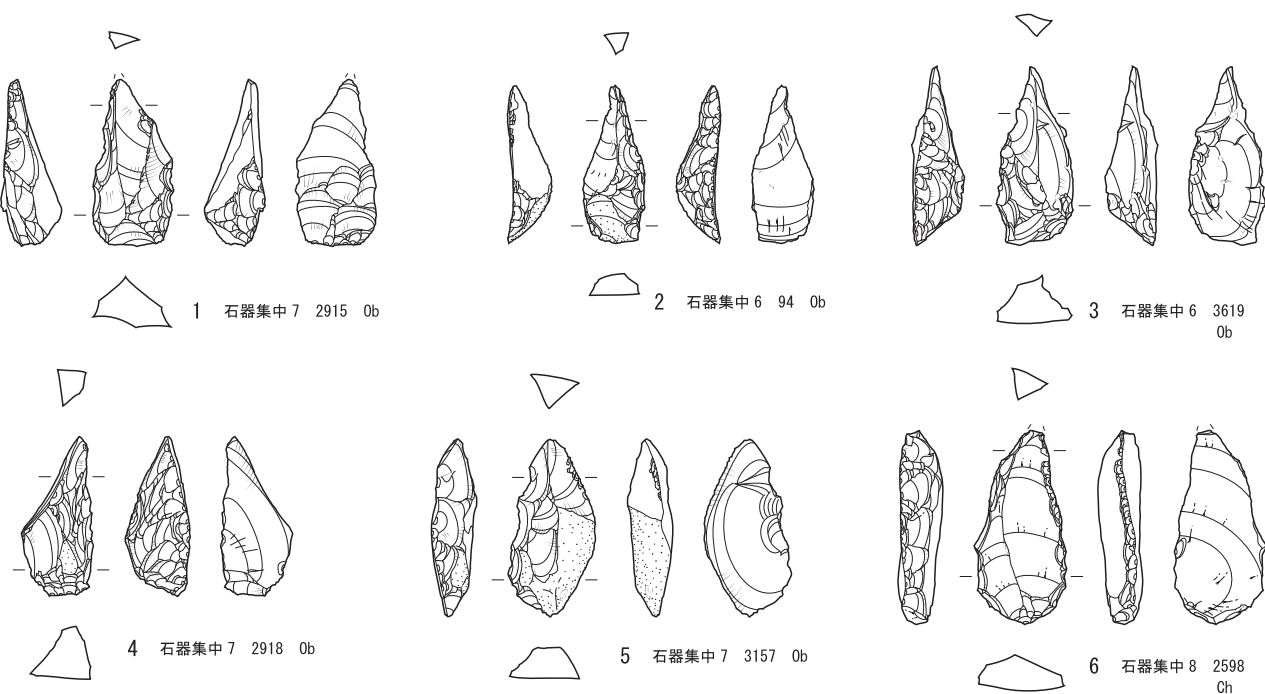
【出土遺物】E地点出土石器－1～3は黒曜石製の細石刃である。1は背面に広く原礫面を残置している。背面構成から連続して剥取していることが窺える。石器集中1出土である。2は末端を少々欠損している。両側縁には微細剥離痕が見受けられる。頭部には頭部調整が観察される。1トレンチ出土である。3は左側縁に原礫面を残置している。背面構成から連続して剥取していることが窺える。石器集中1表土一括出土である。4～7はナイフ形石器である。4はチャート製の先端・基部加工である。比較的薄身の縦長剥片を素材としており、打面・打点ともに残置している。素材剥片の打点側を基部とし背面側に左右両側縁から調整を施している。先端は背面側に左側縁からの調整である。形状から剥片尖頭器の可能性も窺えよう。石器集中3出土である。5は頁岩製の二側縁加工である。横長剥片を素材とし、素材の末端側に連続した調整を施している。基部左側縁は一撃により形状を作出しており、この打撃により素材剥片の打点が削除されている。1トレンチ出土である。6は黒曜石製の二側縁加工である。縦長剥片を素材としている。左側縁上部の刃部ははじめに一撃により大きく形状を作出した後、先端に細かな調整を施している。右側縁および基部は裏面側からと背面中央の稜上の二方向から調整を施している。11トレンチ出土である。7はチャート製の二側縁加工であり、切出し状を呈する。素材は横長剥片であり、打点側と末端側の両側の背面に調整を施し、素材の一边を刃部としている。裏面基部にも調整が見受けられる。石器集中3出土である。8は黒曜石製の楔形石器である。上下両端に両極剥離痕が認められる。右側面は同時割れと思われる。左側縁には丁寧な刃潰し加工が見受けられ、ナイフ形石器の転用と考えられよう。素材剥片は縦長剥片と思われ、打点側を基部に調整を施している。5トレンチ一括出土である。

F地点出土石器－1～14はナイフ形石器である。1・2は二側縁加工である。1は縦長剥片を素材とし、打点側を基部としている。背面は左側縁および右側縁基部に調整を施している。裏面はバルブを除去するような調整が見受けられる。右側縁刃部付近には微細剥離痕が観察される。石器集中7出土である。2は縦長剥片を素材とし、末端側を基部としている。調整は背面のみであり、右側縁および左側縁基部に調整を施している。原礫面が基部付近に残置している。石器集中6出土である。3～5は一側縁加工である。横長剥片を素材としており、末端側の背面に調整を施している。石器集中6出土である。4は横長剥片を素材とし、打点側の背面に急角度な調整を施している。背面中央の稜上からも調整が認められる。石器集中7出土である。5は横長剥片を素材とし、打点側の背面に調整を施している。背面には原礫面が広く残置している。刃部には微細剥離痕が見受けられる。石器集中7出土である。6は二側縁加工である。縦長剥片を素材とし、打点を残置している。左側縁には急角度な調整を施している。石器集中8出土である。7は一側縁加工であり、切出し状を呈する。横長剥片を素材とし末端側の背面に調整を施している。打面・打点ともに残置しており、単剥離面打面である。礫群5出土である。8は二側縁加工であり、切出し状を呈する。不定形剥片を素材とし、打面側の背面に粗い調整を施している。礫群12出土である。9は二側縁加工である。縦長剥片を素材とし、打点側を基部としている。打点は残置している。背面に調整を施している。石器集中8出土である。10は先端・基部加工である。縦長剥片を素材とし打点側を基部としている。打面・打点は残置している。背面には原礫面が広く残置している。調整は背面のみである。石器集中8出土である。11は先端・基部調整であり、基部を欠損している。縦長剥片を素材とし、バルブ付近を除去していると思われる。基部は左側縁に、先端付近は右側縁に調整を施している。石器集中8出土である。12は二側縁加工である。縦長剥片を素材とし、打点側を基部としている。左側縁は背面に、基部調整は裏面側に調整を施している。4トレンチ一括出土である。13は二側縁加工であり、先端を欠損している。縦長剥片を素材とし、打点側を基部としている。

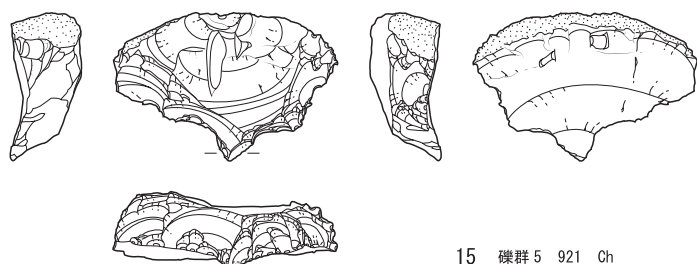
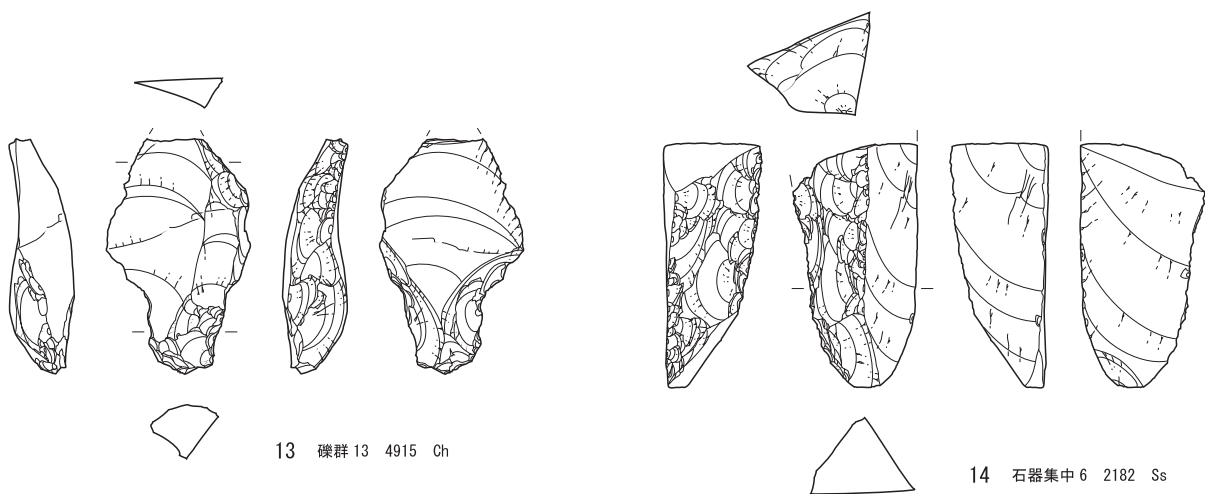
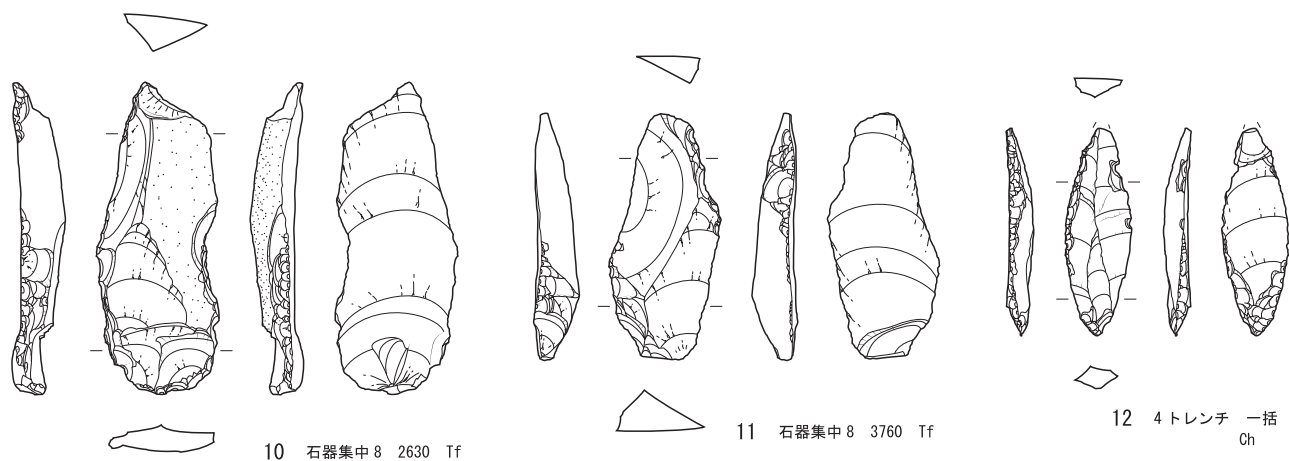
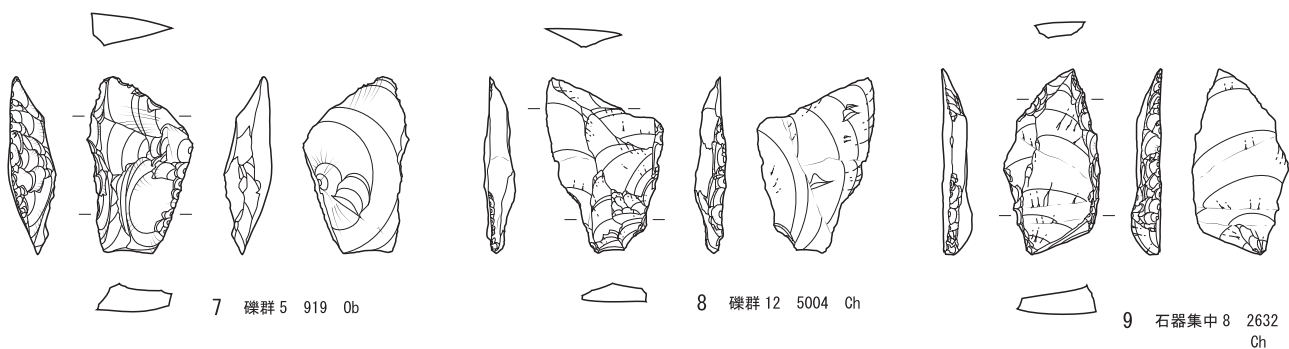
E地点出土石器



F地点出土石器



第6図 南止遺跡E・F地点出土遺物実測図(1) (1~3:1/1, その他:4/5)



基部調整は裏面側に施されている。全体的に調整は粗く思われる。形状から剥片尖頭器の可能性も窺えよう。礫群 13 出土である。14 は刃部を欠損している。素材は比較的基厚な縦長剥片であると思われる。左側縁に裏面側からと背面中央の稜上の 2 方向から調整を施している。石器集中 6 出土である。1～5・7 が黒曜石製、6・8・12・13 がチャート製、9 が頁岩製、10・11 が凝灰岩製、14 が砂岩製である。15 はチャート製の石錐である。素材は横長剥片であり、打面側に調整を施し、錐部を作出している。原礫面を広く残置している。礫群 5 出土である。

なお、南止遺跡 C・D 地点の試掘確認調査については既に報告済みであるが（註 1）、調査成果の詳細については、これまでの成果をまとめて今後報告する予定である。

No.	遺跡名	地点	遺構名	遺物 No.	器種	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	座標 X(m)	座標 Y(m)	標高 (m)
1	南止遺跡	E	石器集中 1	10	細石刃	黒曜石	26.92	5.16	2.87	0.3	-20575.830	-28913.512	45.408
2	南止遺跡	E	1 トレンチ	4	細石刃	黒曜石	19.46	5.29	1.82	0.2	-20562.719	-28881.870	45.495
3	南止遺跡	E	石器集中 1	表土一括	細石刃	黒曜石	21.12	5.63	3.07	0.1			
4	南止遺跡	E	石器集中 3	3	ナイフ形石器	チャート	54.53	29.38	7.09	7.9	-20637.370	-28875.762	45.050
5	南止遺跡	E	1 トレンチ	6	ナイフ形石器	頁岩	51.19	19.09	9.82	6.8	-20535.434	-28824.588	45.716
6	南止遺跡	E	11 トレンチ	1	ナイフ形石器	黒曜石	39.10	15.76	11.06	4.0	-20749.485	-29057.051	47.072
7	南止遺跡	E	石器集中 3	34	ナイフ形石器	チャート	28.40	15.41	8.02	3.2	-20631.269	-28878.718	45.070
8	南止遺跡	E	5 トレンチ	一括	楔形石器	黒曜石	21.52	9.44	6.85	1.3			
1	南止遺跡	F	石器集中 7	2915	ナイフ形石器	黒曜石	27.44	13.27	9.27	2.2	-20626.335	-28837.385	45.339
2	南止遺跡	F	石器集中 6	94	ナイフ形石器	黒曜石	25.76	10.29	7.15	1.3	-20619.518	-28837.151	45.114
3	南止遺跡	F	石器集中 6	3619	ナイフ形石器	黒曜石	29.24	12.54	8.95	2.1	-20618.641	-28836.845	44.990
4	南止遺跡	F	石器集中 7	2918	ナイフ形石器	黒曜石	26.41	11.72	10.23	2.3	-20625.953	-28836.286	45.330
5	南止遺跡	F	石器集中 7	3157	ナイフ形石器	黒曜石	29.14	13.80	6.52	2.2	-20625.041	-28838.083	45.242
6	南止遺跡	F	石器集中 8	2598	ナイフ形石器	チャート	31.79	15.48	7.45	3.3	-20626.537	-28819.862	44.871
7	南止遺跡	F	礫群 5	919	ナイフ形石器	黒曜石	30.13	17.49	7.69	3.2	-20625.042	-28842.222	45.349
8	南止遺跡	F	礫群 12	5004	ナイフ形石器	チャート	29.57	19.06	4.73	1.9	-20622.899	-28778.960	44.766
9	南止遺跡	F	石器集中 8	2632	ナイフ形石器	頁岩	29.98	16.03	4.31	2.0	-20627.563	-28819.140	44.971
10	南止遺跡	F	石器集中 8	2630	ナイフ形石器	凝灰岩	51.30	20.24	8.45	7.4	-20627.506	-28819.374	44.958
11	南止遺跡	F	石器集中 8	3760	ナイフ形石器	凝灰岩	40.49	17.53	8.08	4.0	-20626.736	-28819.941	44.755
12	南止遺跡	F	4 トレンチ	一括	ナイフ形石器	チャート	34.08	10.91	4.21	1.4			
13	南止遺跡	F	礫群 13	4915	ナイフ形石器	チャート	39.56	24.10	11.07	7.5	-20618.352	-28765.041	44.875
14	南止遺跡	F	石器集中 6	2182	ナイフ形石器	砂岩	38.78	20.73	15.36	12.1	-20618.480	-28836.666	45.022
15	南止遺跡	F	礫群 5	921	石錐	チャート	25.45	36.88	11.41	9.2	-20625.017	-28842.462	45.385

第 3 表 南止遺跡 E・F 地点遺物観察表

註 1 三芳町教育委員会 2003 『町内遺跡発掘調査報告書 V』

3. 宮前遺跡A地点の調査

1) 遺跡の立地と環境

宮前遺跡は、狭山丘陵に端を発し、三芳町とふじみ野市の行政界付近を流れる砂川によって形成された緩い谷の右岸部に位置している。これまで試掘確認調査が行われたことはなかったが、遺跡北側の道路拡張工事中に横穴の開口部が発見されており、また以前は崖に面して穴が開いており、中に観音様が祀られていたという「穴観音」の伝承も残っていることから、古代の横穴墓の存在が想定されていた。

2) 調査の概要

今回の調査地点であるA地点は、埼玉県入間郡三芳町大字北永井字宮前71-7に位置する。調査は、個人住宅建築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成15年5月20日から6月11日にかけて499㎡を実施した。調査の結果、奈良・平安時代の木炭窯が検出されたため、申請者と協議を行い、盛土にて遺跡を保存することとなった。

3) 遺構と遺物

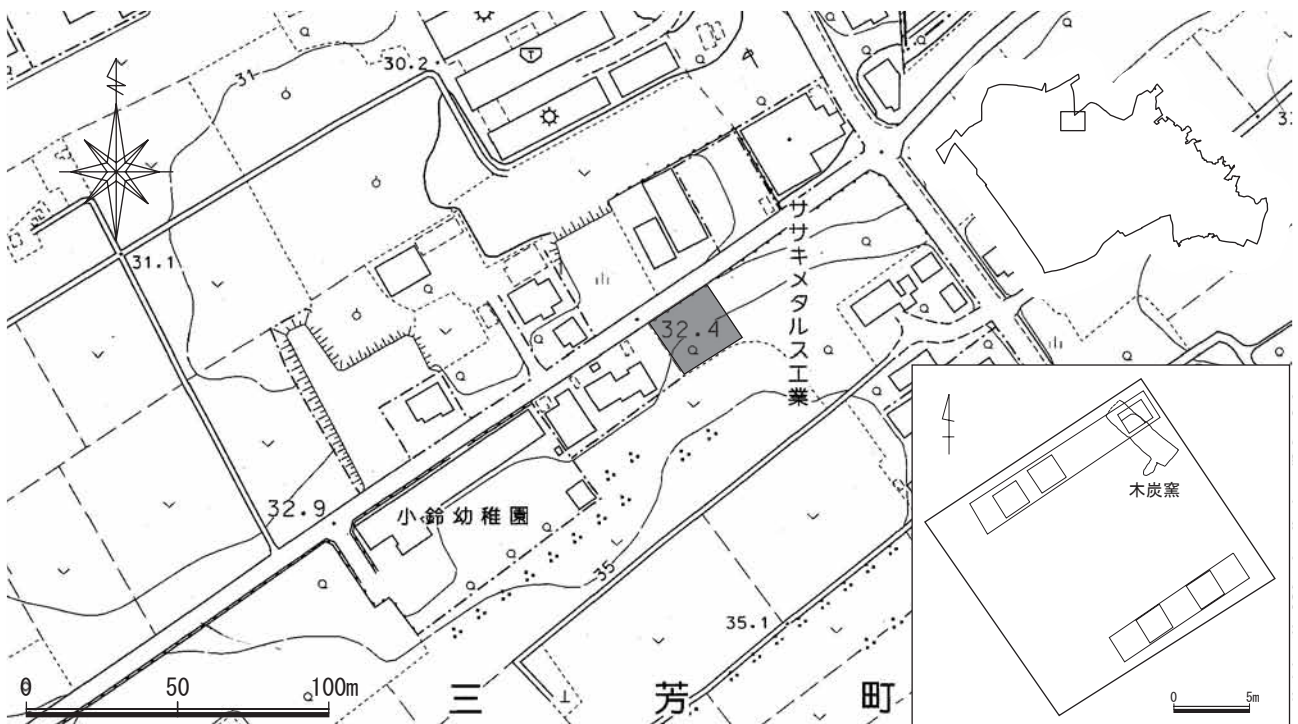
遺構は、木炭窯1基を検出した。

【1号木炭窯】谷部と直交して南東方向に構築される。焚口部分は攪乱されており確認できなかったが、平面形は長方形で、幅2.2m×奥行5.2m(残存部分)。天井は検出時に一部崩落した部分を除いてほぼ全て残っており、断面形態はカマボコ形である。天井高は焚口付近で1.3m、奥壁へ向かって低くなる。

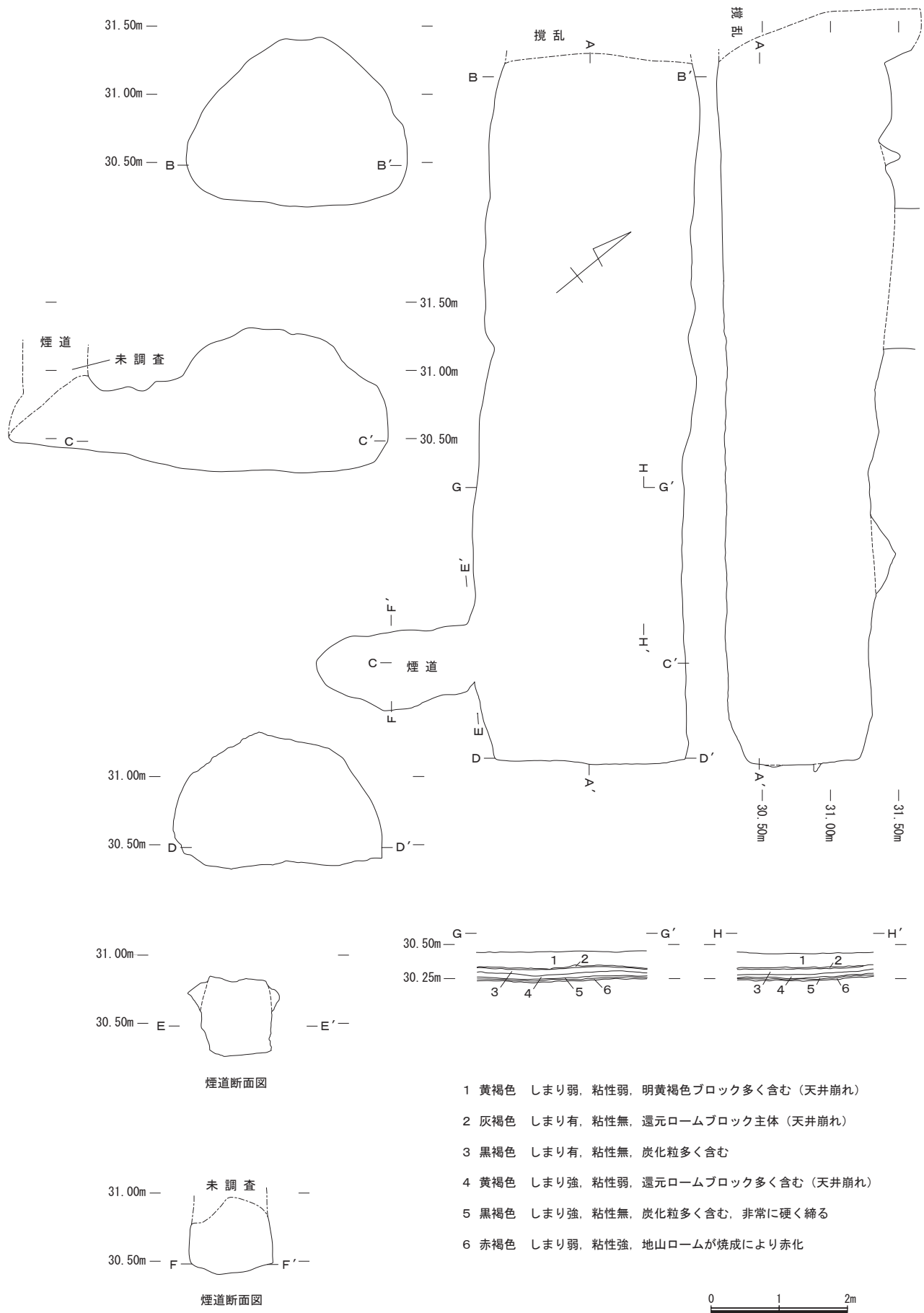
窯内は酸化土・還元土・炭化材が交互に堆積し、最低2回の操作が確認できる。床面の傾斜角は1°である。床から天井まで焼成され、内部全体が灰色である。また、壁面には窯を構築する際のものと思われる工具痕が数箇所確認できた。

煙道は右側壁、奥壁から2.1mの位置に1ヶ所検出した。床面とほぼ同じ高さから掘削されており、奥行1.1m×幅0.6mを測る。煙道入口は一部剥落していたが、方形に作られていた。遺物は、窯内の覆土を全て回収して篩にかけたが、炭化材以外の出土はなかった。

なお、窯内部床面直上から検出された炭化材と、土層図中3層より検出された炭化米を放射性炭素年代測定にかけた結果、ともに7世紀半ばから8世紀後半という数値が得られた(附編1参照)。



第8図 宮前遺跡A地点調査位置図(1/2,500)・遺構配置図(1/500)



- 1 黄褐色 しまり弱, 粘性弱, 明黄褐色ブロック多く含む (天井崩れ)
- 2 灰褐色 しまり有, 粘性無, 還元ロームブロック主体 (天井崩れ)
- 3 黒褐色 しまり有, 粘性無, 炭化粒多く含む
- 4 黄褐色 しまり強, 粘性弱, 還元ロームブロック多く含む (天井崩れ)
- 5 黒褐色 しまり強, 粘性無, 炭化粒多く含む, 非常に硬く締る
- 6 赤褐色 しまり弱, 粘性強, 地山ロームが焼成により赤化

第9図 宮前遺跡A地点1号木炭窯平面図・断面図・土層図 (1/80)

4. 俣埜遺跡の調査

a. H地点

1) 遺跡の立地と環境

俣埜遺跡は、武蔵野台地東端部を開析する新河岸川の支流である、江川の上流部右岸台地上に位置する。本遺跡は昭和52年度に行われた最初の調査からこれまでに、旧石器時代の石器、礫群、縄文時代早期の炉穴25基、縄文時代中期の住居址1軒、柄鏡形住居址1軒、奈良・平安時代の木炭窯、住居址3軒ほか製鉄関連遺構、近世から近代と考えられる溝状遺構が検出されている。旧石器時代、縄文時代中期、奈良時代、平安時代の遺構の存在が明らかになっている遺跡である。

2) 調査の概要

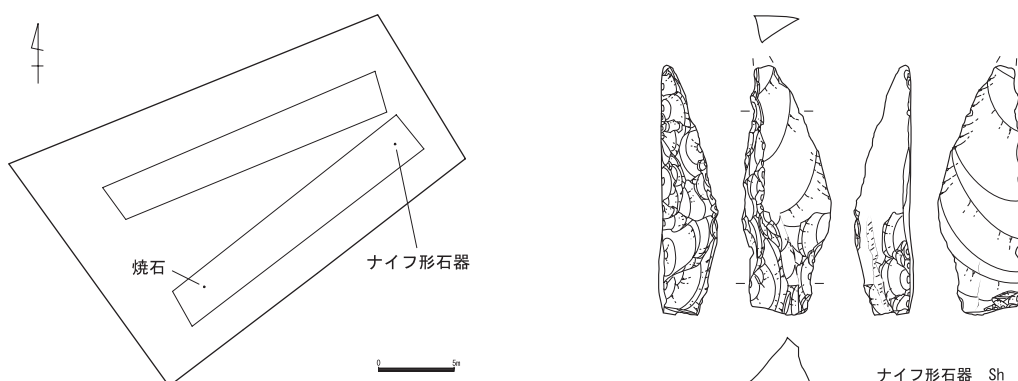
今回の調査地点であるH地点は、埼玉県入間郡三芳町大字藤久保字俣埜354-8他に位置する。宅地造成に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成16年8月17日から9月1日にかけて398㎡を実施した。調査の結果、旧石器時代の遺物が検出されたため、申請者と協議を行い、盛土にて遺跡を保存することとなった。

3) 遺構と遺物

遺物は、VI層下部より頁岩製のナイフ形石器1点、III層より礫1点が出土した。



第10図 俣埜遺跡H・I地点調査位置図(1/2,500)



第11図 俣埜遺跡H地点遺構配置図(1/500)・出土石器(3/5)

b. I 地点

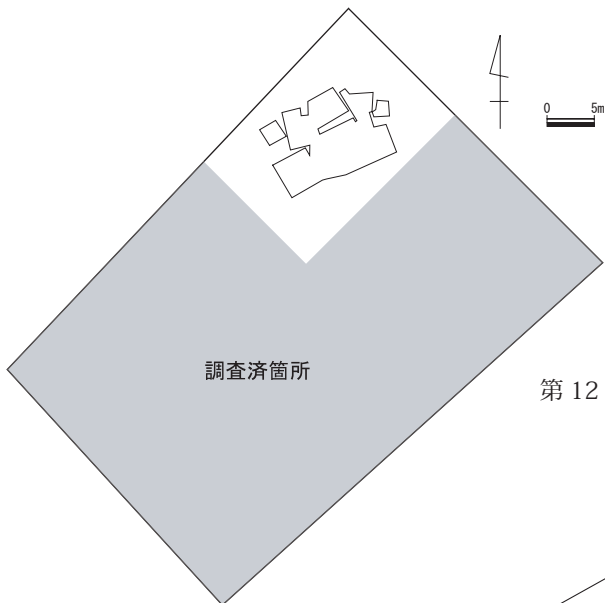
1) 調査の概要

I 地点は、埼玉県入間郡三芳町大字藤久保字俣埜 350-8 他に位置する。プール建築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成 17 年 1 月 18 日から 3 月 7 日にかけて 1,758 m²を実施した。調査の結果、奈良・平安時代の木炭窯、粘土採掘坑、土坑が検出されたため、申請者と協議の結果、遺構が確認された範囲は掘削を行わず、盛土にて遺跡を保護することとなった。

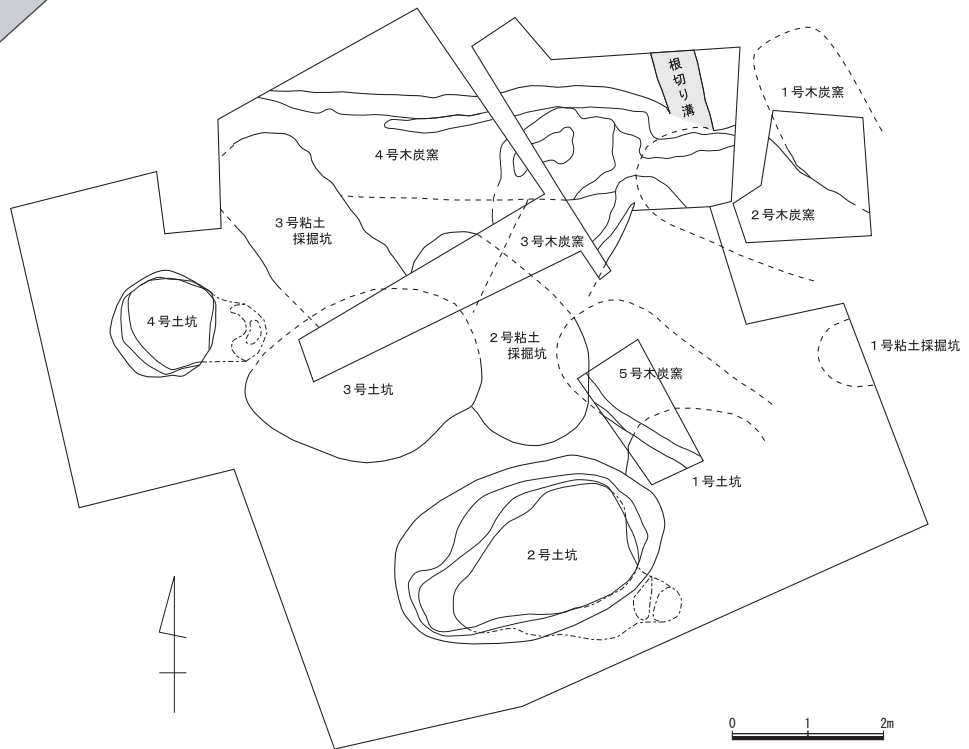
2) 遺構と遺物

遺構は木炭窯 5 基、粘土採掘坑 3 基、時期不明の土坑 4 基を検出した。遺物は、縄文時代土器片、鉄滓が出土した。なお、2 号木炭窯床面直上と、同木炭窯の覆土中から検出された炭化材を放射性炭素年代測定にかけた結果、ともに 7 世紀後半～9 世紀後半という数値が得られた(付編 2 参照)。

調査成果の詳細については、隣接地点の成果も含めて今後報告する予定である。



第 12 図 俣埜遺跡 I 地点開掘図 (1/800)



第 13 図 俣埜遺跡 I 地点遺構平面図 (1/100)

5. 南新埜遺跡A地点の調査

1) 遺跡の立地と環境

南新埜遺跡は、唐沢堀最上流域付近に広がる。過去の調査では、平成13年度の試掘確認調査において旧石器時代の石器および礫が検出されている。旧石器時代から縄文時代の遺構の存在が推定される遺跡である。

2) 調査の概要

今回の調査地点であるA地点は、埼玉県入間郡三芳町大字藤久保字南新埜1088-1他に位置する。町立総合体育館建設に伴う工事に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成16年10月18日から11月4日にかけて603㎡を実施した。調査の結果、礫群が検出されたため、申請者と協議を行い、範囲を限定した196㎡について平成16年11月5日から11月25日にかけて、原因者負担による発掘調査を実施した。

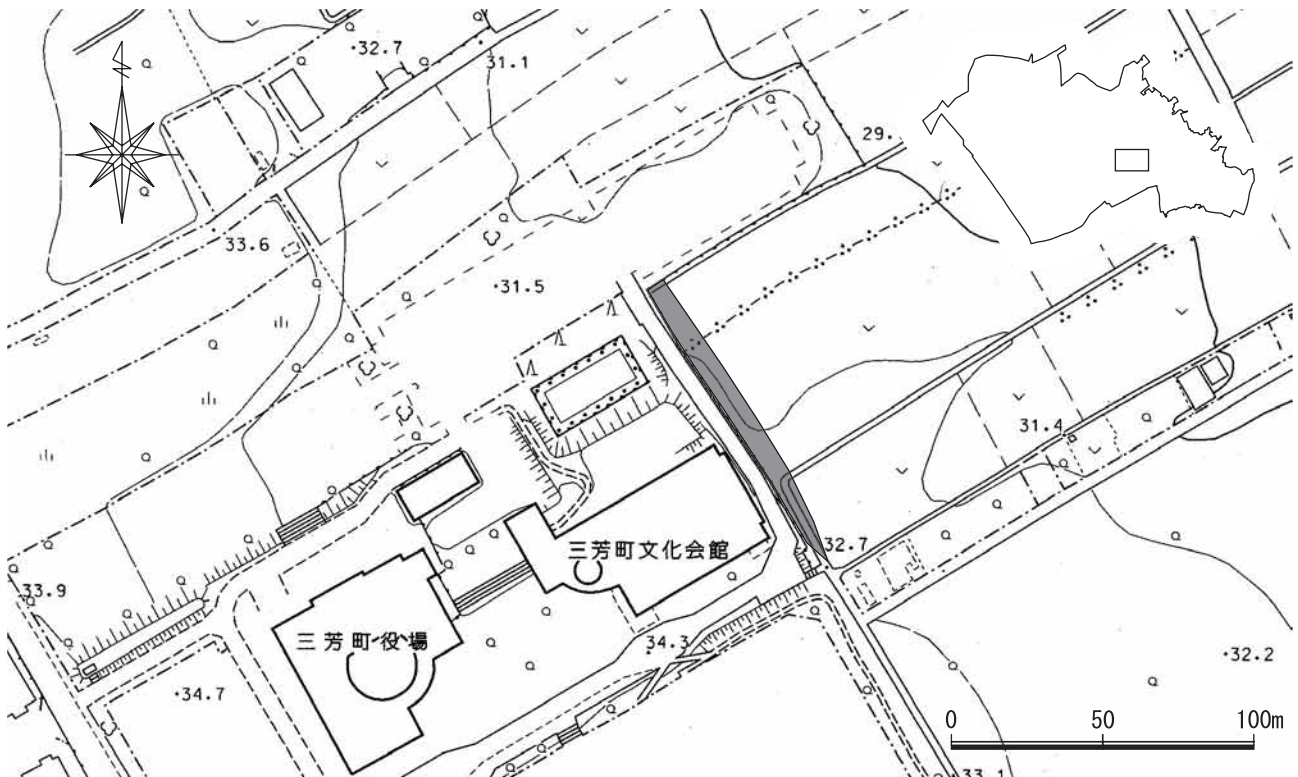
周辺の地形は、遺跡のほぼ中央部に東西へ走る埋没谷が入り込んでおり、今回の調査地点は周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号32-018)の西端部付近、埋没谷上流域右岸に位置している。谷へ向かって落ち込んでいく肩部にあたる。

3) 遺構と遺物

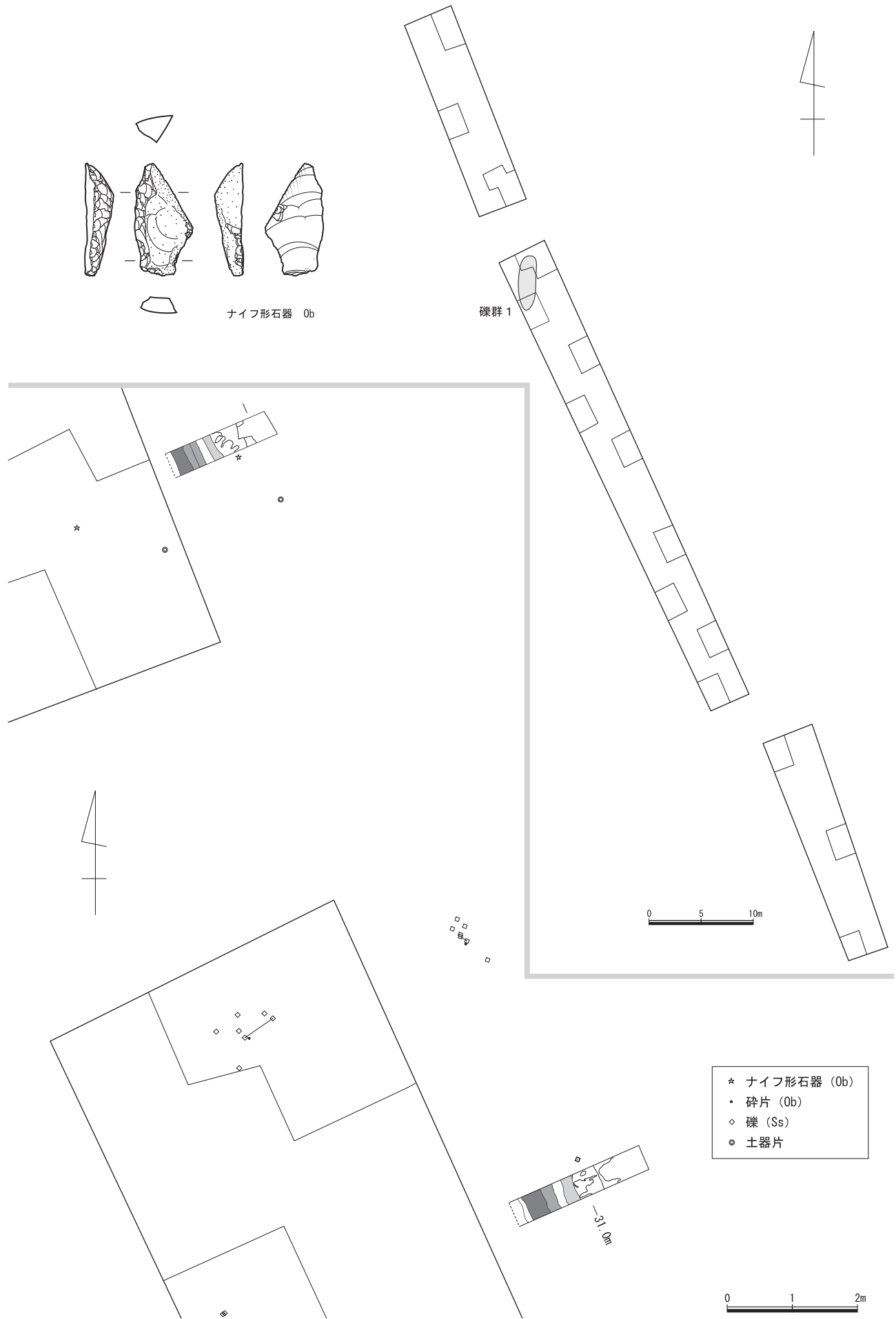
遺構は、IV層から礫群1カ所が検出され、遺物はナイフ形石器1点、碎片1点、礫9点、縄文時代土器片1点が出土した。

【礫群1】遺物の分布範囲は、南北5m東西1.5mの範囲で散漫に広がる。礫の総点数は9点、小規模な礫群である。出土層位はIV層、石材はすべて砂岩である。接合は2個体認められた。ナイフ形石器は黒曜石製、同じくIV層からの出土である。

今回の調査では遺物の出土が少なかったが、調査地点東側の畑では尖頭器や石鏃などが多数表面採集されていることから、今後の調査が期待される。



第14図 南新埜遺跡A地点調査位置図(1/2,500)



第 15 図 南新埜遺跡 A 地点遺構配置図 (1/500)・礫群 1 遺物分布図 (1/80)・出土石器 (1/1)

I. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯内床面直上より出土した炭化材 1 点である。

3. 方法

試料は、割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柎目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

試料は 広葉樹 broad-leaved tree であった。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は保存状態が極めて悪い為、広範囲の観察が困難であったので広葉樹の同定にとどまる。

参考文献：佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第 1 号，植生史研究会，p.242

II. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は、宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯内より検出された種実 1 点である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

試料はイネに同定された。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記し、大きさを計測し、写真に示す。

イネ *Oryza sativa* L. 果実(炭化) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。大きさは長さ 4.5mm、幅 2.8mm である。

5. 所見

佐藤(1988)のコメの形態の研究と対照すると、試料は粒形 1.6、粒の大きさ 12.6 となり、短粒で小粒となる。弥生時代および古墳時代以降で最も多い形態のものである。

参考文献

佐藤敏也(1971)日本の古代米, 雄山閣出版株式会社.

佐藤敏也(1988)弥生のイネ. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版株式会社, p.97-111.

南木睦彦(1991)栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.

Ⅲ. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

ここでは、宮前遺跡A地点における堆積年代を明らかにするために、出土した炭化材を対象として加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、炭化米1点と炭化材1点の計2点である(第4表)。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第4表 宮前遺跡A地点出土炭化材の放射性炭素年代測定試料と方法

試料名	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	炭化米(カビ無)	超音波煮沸洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 2	炭化物(カビ無)	超音波煮沸洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS(Accelerator Mass Spectrometry)は、加速器質量分析法。

3. 結果

年代測定結果を第5表に示す。

第5表 宮前遺跡A地点出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

試料名	測定No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代(西暦)
No. 1	PLD-4737	-18.4	1316 ± 21	1 σ : cal AD 660 ~ 700, : cal AD 750 ~ 770 2 σ : cal AD 650 ~ 720, : cal AD 740 ~ 770
No. 2	PLD-5155	-9.7	1305 ± 22	1 σ : cal AD 660 ~ 710, : cal AD 740 ~ 770 2 σ : cal AD 660 ~ 780

1) δ (デルタ) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

2) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 測定値に補正值を加えて算出した年代。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代の算出には、 ^{14}C の半減期として国際的慣例により Libby の半減期 5,568 年を使用した。

3) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (シグマ) (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代較正を行った結果、試料 1 で 1316 \pm 21 年 BP (2 σ の暦年代で AD 650 ~ 720 年, AD 740 ~ 770 年)、試料 2 で 1305 \pm 22 年 BP (同じく AD 660 ~ 780 年) の年代値がそれぞれ得られた。こうしたことから、試料 1 と試料 2 では年代値に大きな差異は見られず、ほぼ同時期(古代)に堆積したものと推定される。

附編 自然化学分析 2

俣埜遺跡 I 地点自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、俣埜遺跡 I 地点で検出された 2 号木炭窯より出土の炭化材 2 点 (MT-I001, MT-I002) である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柾目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

以下に同定の根拠となった特徴を記し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1 ~ 数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列もしくは散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm ぐらいに達する。

材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

不明 unknown

木材の形質を呈していない。

5. 所見

同定の結果、俣埜遺跡 I 地点で検出された 2 号木炭窯より出土した炭化材は、コナラ属コナラ節 1 点、不明 1 点であった。コナラ属コナラ節は日当たりの良い山野に生育する落葉高木で、温帯に分布する。ミズナラなどの冷温帯落葉紅葉樹林の主要構成要素が含まれる。当時、遺跡周辺に生育していたと考えられる。

参考文献：佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第 1 号，植生史研究会，p.242

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

ここでは、俣埜遺跡 I 地点における堆積年代を明らかにするために、出土した炭化材を対象として加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、炭化材 2 点である（第 6 表）。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 6 表 俣埜遺跡 I 地点出土炭化材の放射性炭素年代測定試料と方法

試料名	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	炭化物(カビ無)	超音波煮沸洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 2	植物遺体(カビ無)	超音波煮沸洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS(Accelerator Mass Spectrometry)は、加速器質量分析法。

3. 結果

年代測定結果を第 7 表に示す。

第 7 表 俣埜遺跡 I 地点出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

試料名	測定No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代(西暦)
No. 1	PLD-4735	-24.5	1247 ± 21	1 σ : cal AD 690 ~ 750, : cal AD 760 ~ 780 2 σ : cal AD 680 ~ 830, : cal AD 840 ~ 870
No. 2	PLD-4736	-26.3	1241 ± 23	1 σ : cal AD 690 ~ 750, : cal AD 760 ~ 780, : cal AD 790 ~ 810 2 σ : cal AD 680 ~ 870

1) δ (デルタ)¹³C 測定値

試料の測定 ¹⁴C / ¹²C 比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C / ¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

2) 補正 ¹⁴C 年代値

δ ¹³C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C / ¹²C 測定値に補正値を加えて算出した年代。¹⁴C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代の算出には、¹⁴C の半減期として国際的慣例により Libby の半減期 5,568 年を使用した。

3) 暦年代

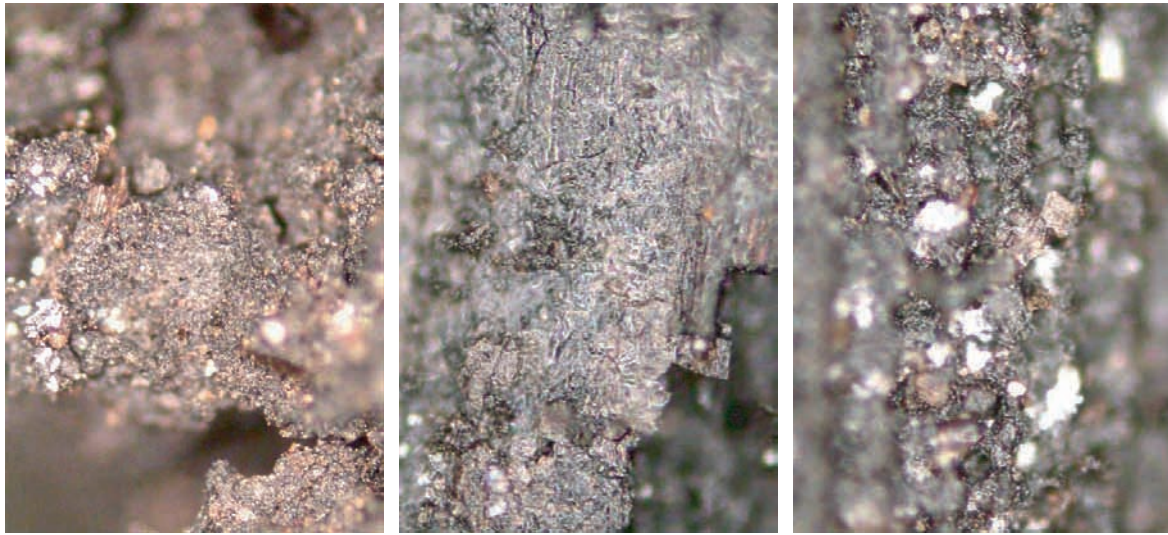
過去の宇宙線強度の変動による大気中 ¹⁴C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ¹⁴C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ¹⁴C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ¹⁴C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (シグマ) (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ¹⁴C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ ・ 2 σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代較正を行った結果、試料 1 で 1247 ± 21 年 BP (2 σ の暦年代で AD 680 ~ 830 年, AD 840 ~ 870 年)、試料 2 で 1241 ± 23 年 BP (同じく AD 680 ~ 870 年) の年代値がそれぞれ得られた。こうしたことから、試料 1 と試料 2 はほぼ同時期 (古代) に堆積したものと推定される。

宮前遺跡 A地点の炭化材

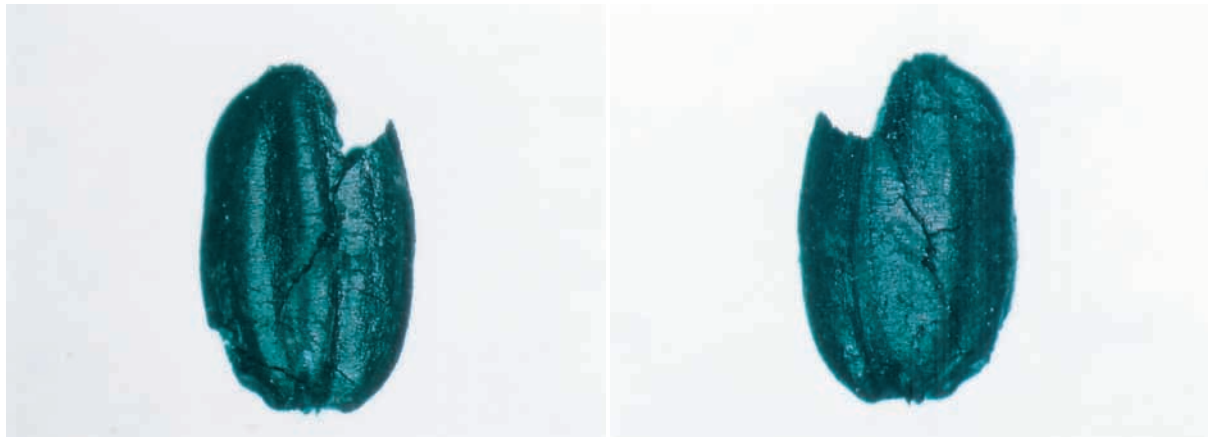


横断面 ————— : 0.4mm
1号木炭窯床面直上 広葉樹

放射断面 ————— : 0.4mm

接線断面 ————— : 0.2mm

宮前遺跡 A地点の種実

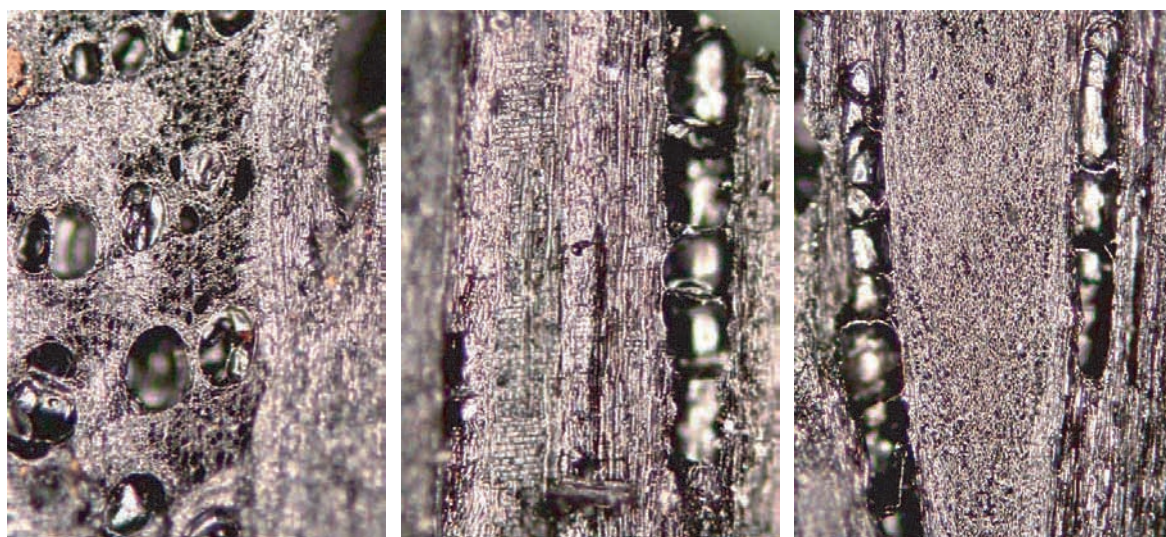


1 イネ炭化果実

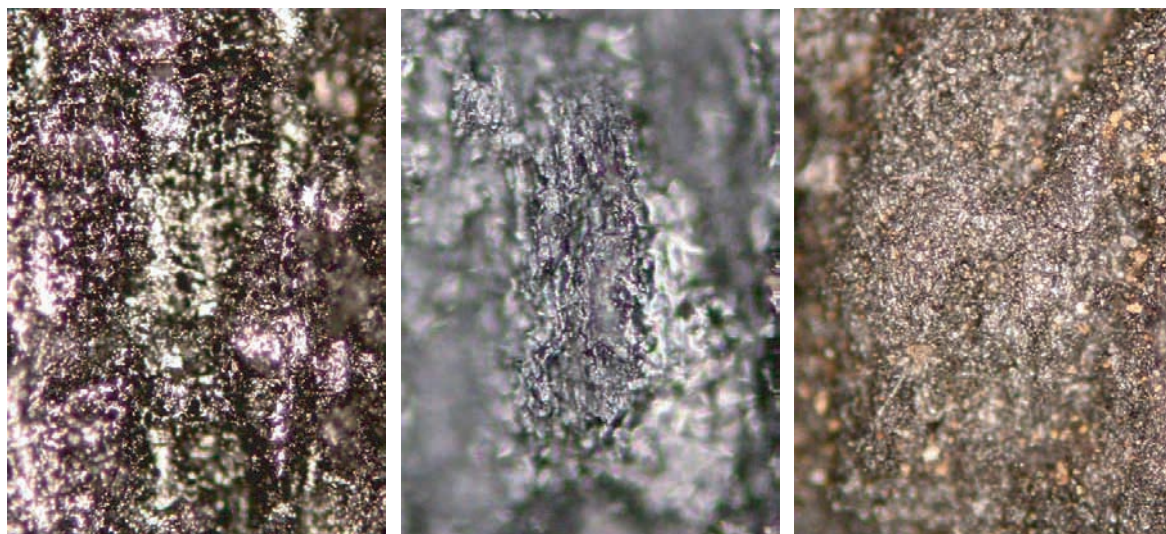
2 同左

————— 1.0mm

俣埜遺跡 I 地点の炭化材



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.4mm 接線断面 ————— : 0.4mm
 1. 2号木炭窯b層:MT-I002 コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.4mm
 2. 2号木炭窯i層:MT-I001



藤久保東遺跡 K 地点調査前全景



藤久保東遺跡 K 地点表土剥ぎ



藤久保東遺跡 K 地点調査風景



藤久保東遺跡 K 地点石器集中 1



藤久保東遺跡 K 地点石器集中 1 遺物出土状況



藤久保東遺跡 K 地点土層堆積状況



藤久保東遺跡 K 地点完掘



藤久保東遺跡 K 地点埋め戻し



K-54 Sh



接合個体 No. 1 Ch



南止遺跡 E・F 地点調査前全景



南止遺跡 E 地点溝検出状況



南止遺跡 E 地点調査風景



南止遺跡 E 地点礫群 1



南止遺跡 E 地点礫群 1 遺物出土状況



南止遺跡 E 地点石器集中 3



南止遺跡 E 地点石器集中 3 遺物出土状況



南止遺跡 F 地点土坑検出状況



南止遺跡 F 地点調査風景



南止遺跡 F 地点礫群 3



南止遺跡 F 地点礫群 6



南止遺跡 F 地点石器集中 6・7



南止遺跡 F 地点礫群 10



南止遺跡 F 地点土層堆積状況



南止遺跡 E・F 地点埋没谷土層堆積状況



南止遺跡 F 地点完掘



南止遺跡 E 地点出土遺物



南止遺跡 F 地点出土遺物



宮前遺跡 A 地点調査前全景



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯検出状況



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯内部状況



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯調査風景



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯土層堆積状況



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯工具痕



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯煙道



宮前遺跡 A 地点 1 号木炭窯完掘



俣埜遺跡H地点調査前全景



俣埜遺跡H地点遺物出土状況



俣埜遺跡H地点完掘



俣埜遺跡H地点出土遺物



俣埜遺跡 I 地点調査前全景



俣埜遺跡 I 地点調査風景



俣埜遺跡 I 地点 2 号土坑



俣埜遺跡 I 地点 1 号粘土採掘坑土層堆積状況



俣埜遺跡 I 地点 2・3・4 号木炭窯



俣埜遺跡 I 地点 2 号木炭窯土層堆積状況



俣埜遺跡 I 地点 3・4 号木炭窯土層堆積状況



俣埜遺跡 I 地点 5 号木炭窯



南新埜遺跡 A 地点調査前全景



南新埜遺跡 A 地点礫群 1



南新埜遺跡 A 地点土層堆積状況



南新埜遺跡 A 地点出土遺物



藤久保東遺跡Q地点調査前全景



藤久保東遺跡Q地点完掘



三芳唐沢遺跡調査前全景



三芳唐沢遺跡完掘



藤久保東第二遺跡C地点調査前全景



藤久保東第二遺跡C地点調査風景



藤久保東第二遺跡C地点遺物出土状況



藤久保東第二遺跡C地点土層堆積状況



藤久保東第二遺跡C地点完掘



中東遺跡調査前全景



中東遺跡完掘



古井戸山遺跡調査前全景



古井戸山遺跡調査風景



古井戸山遺跡遺物出土状況



古井戸山遺跡遺構検出状況



古井戸山遺跡遺構検出状況



本村北遺跡調査前全景



本村北遺跡完掘



三芳唐沢遺跡 a 調査前全景



三芳唐沢遺跡 a 完掘



三芳唐沢遺跡 b 調査前全景



三芳唐沢遺跡 b 完掘



藤久保東遺跡 T 地点調査前全景



藤久保東遺跡 T 地点調査風景



藤久保東遺跡 T 地点遺物出土状況



藤久保東遺跡 T 地点礫群検出状況



藤久保東遺跡 T 地点完掘



境松遺跡 A 地点調査前全景



境松遺跡 A 地点遺物出土状況



境松遺跡 A 地点完掘



新開遺跡調査前全景



新開遺跡完掘

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちょうないいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書 名	町内遺跡発掘調査報告書	巻 次	VI				
副書名							
巻 名							
シリーズ名	三芳町埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	32						
編著者名	大久保 淳・中村 愛						
編集機関	三芳町教育委員会						
所在地	〒 354-8555 埼玉県入間郡三芳町大字藤久保 1100 番地 1						
発行年月日	2006 年(平成 18 年)3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北 緯 東 経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
ふじくぼひがしいせき 藤久保東遺跡 K 地点	ふじくぼ 藤久保 780-1	113247	32-012	35° 50' 11" 139° 31' 45"	20030407 20030428	27	個人住宅
みなしずいせき 南止遺跡 E 地点	かみとめ 上富 704-2 他	113247	32-021	35° 49' 00" 139° 30' 37"	20021105 20021202	18,990	農地改良
みなしずいせき 南止遺跡 F 地点	かみとめ 上富 689-2 他	113247	32-021	35° 49' 01" 139° 30' 41"	20030901 20031031	19,203	農地改良
みやまえいせき 宮前遺跡 A 地点	きたながい 北永井 71-7	113247	32-019	35° 50' 35" 139° 30' 34"	20030520 20030611	499	個人住宅
俣埜遺跡 H 地点	藤久保 354-8 他	113247	32-009	35° 50' 10" 139° 32' 08"	20040817 20040901	398	宅地造成
俣埜遺跡 I 地点	藤久保 350-8 他	113247	32-009	35° 50' 09" 139° 32' 03"	20050118 20050307	1,758	プール建設
南新埜遺跡 A 地点	藤久保 1088-1 他	113247	32-018	35° 49' 44" 139° 31' 40"	20041001 20041104	603	体育館建設 に伴う工事
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項
藤久保東遺跡 K 地点	キャンプ跡	旧石器		VII 石器集中	VII 石器		
南止遺跡 E 地点	キャンプ跡	旧石器		IV～III 石器集中、 礫群	IV～III 石器、礫		
南止遺跡 F 地点	キャンプ跡	旧石器		V～III 石器集中、 礫群	V～III 石器、礫		
宮前遺跡 A 地点	窯跡	奈良・平安		木炭窯			遺物出土無
俣埜遺跡 H 地点	キャンプ跡	旧石器			VII ナイフ形石器		
俣埜遺跡 I 地点	窯跡	奈良・平安		木炭窯、土坑、 粘土採掘坑	鉄滓		
南新埜遺跡 A 地点	キャンプ跡	旧石器		IV 礫群	IV 石器、礫		

三芳町埋蔵文化財報告 32
町内遺跡発掘調査報告書VI

発行日 平成 18 年 3 月 31 日
編集機関 三芳町教育委員会
入間郡三芳町藤久保 1100-1
Tel.049-258-0019
発行 三芳町教育委員会
印刷 深志印刷株式会社